

RD

剥かれた 女子高生姉妹

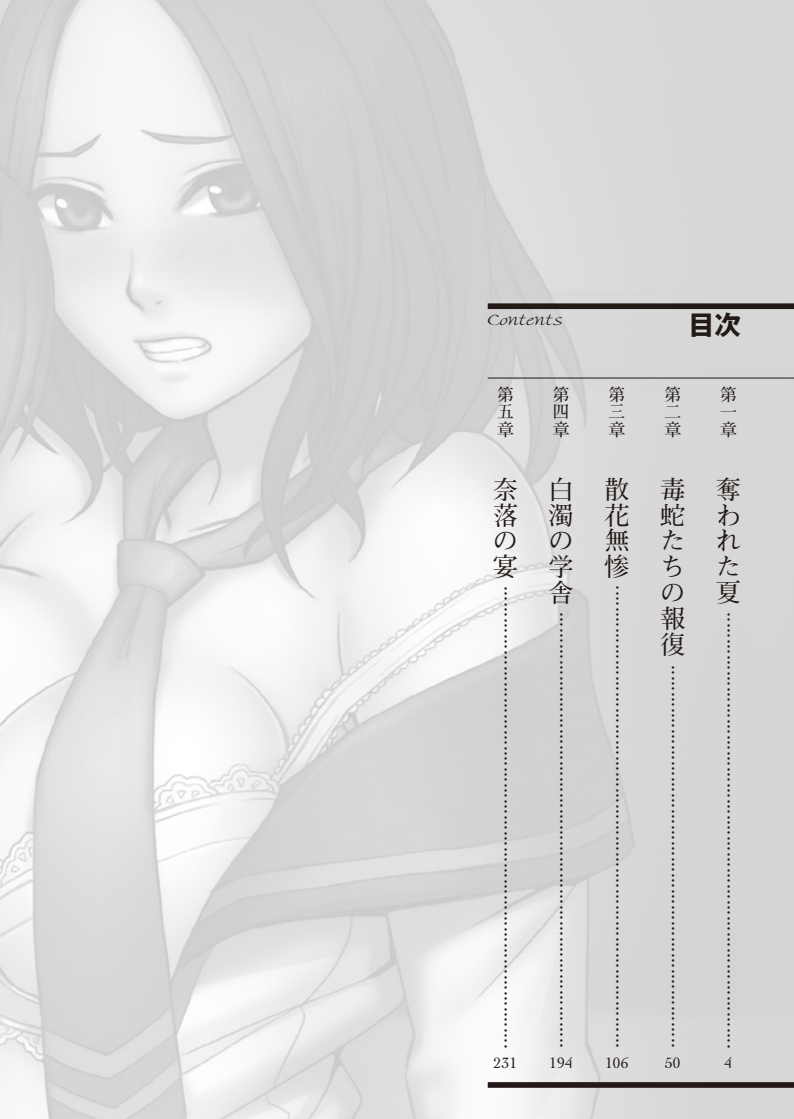
卑劣な淫ら毘

草飼晃

挿絵/猫丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	奪われた夏	4
第二章	毒蛇たちの報復	50
第三章	散花無惨	106
第四章	白濁の学舎	194
第五章	奈落の宴	231

登場人物

Characters

佐倉 咲花 (さくら さきか)

勝ち気で真っすぐな性格の少女。剣道部に所属し、運動神経は良い。同級生の彼氏がいるが、まだ身体を許してはいない。

佐倉 愛良 (さくら あいら)

咲花の妹。引っ込み思案だが心優しい少女。咲花のことを慕っている。姉と違って運動は苦手な福祉部に所属する。

吉田 真 (よしだ まこと)

咲花の彼氏。野球部に所属する平凡な高校生。

氷室 竜也 (ひむろ たつや)

がっしりした体型の不良大学生。レイブの常習犯。

氷室 拳也 (ひむろ けんや)

竜也の双子の弟。体型も顔つきも兄にそっくり。

氷室 明日香 (ひむろ あすか)

竜也、拳也の妹。兄譲りの性格の悪さを持つ。

青熊 (あおくま)

氷室兄弟が刑務所で知り合ったやくざ者。



第一章 奪われた夏

ガソリンの匂いが鼻を刺してくる。七月の陽光は北関東に位置するこの地方都市にも朝から容赦なく降り注いでいた。

国道沿いのガソリンスタンドには、はるばる来日して基地を訪れた在日〇軍の関係者のものらしいレンタカーが停まっている。ここは基地の街でもあった。

彼らの騒々しい話し声といっしょに腐りかけのバターみたいな強い体臭まで漂ってくるように思えて、通りがかかった佐倉咲花さくらさきかは勝ち気そうな細い眉をひそめた。

十六歳。みなみしゅんよう南春陽学園の二年生。女子剣道部に所属している。三年生が引退する秋からは主将になる見こみだった。

背中までかかる黒髪と黒い宝石のような瞳、ほんのりと赤らんだやわらかい頬、そして咲きかけの薔薇の花びらのような艶やかなくちびるの持ち主だ。

百六十二センチの瑞々しい肢体の輝きは、襟と袖に紺のラインが入ったシンプルなセーラー服でも、濃紺のプリーツスカートでも、隠しきれてはいなかった。

八十九センチFカップの美乳が布地を内側から突き上げている。脇腹から腰がきれ

いにくびれ、それがいつそう腰骨からお尻にかけての魅惑的な丸みを強調している。スカートから伸びるすなりとした太ももは若々しく漲っている。

「お姉ちゃん、待ってよお」

鼻にかかったような甘い声で呼びかけながら駆け寄ってきたのは、妹の佐倉愛良だ
った。

「どうして急いで学校に行きたがるの？ 期末テスト中は朝練ないんでしょ？」

ないわよ、と咲花は答えた。運動部の早朝練習は確かに休止中だ。

「ははーん」

妹はにつこりしてうなづく。

「わかった。彼氏に早く会いたいんだ？」

「え？」

（ちよ……ちよつと、何を言い出すのよ、愛良ちゃんったら！）

咲花は思わず立ち止まってしまった。

二年生の野球部員吉田真とつき合い始めたのは事実。早く登校して会いたいのも本
当。でもなんとなく恥ずかしかった。だからつい、

「ち……違うわよ」

顔を赤らめながら否定してしまおう。

「ええ？ 違わないでしょ！ お姉ちゃん、すぐ顔に出るんだよねえ」

愛良は咲花より一つ年下の十五歳。高校一年生。無垢そのもののきらきらした瞳と少しぼつてりとしたくちびるが愛らしい。しかし首から下は、すでにはつきりとした成熟を示している。

学園の制服を盛り上げる胸はHカップはあつて、もう咲花より大きい。引き締まった腰つきも見事に実った尻果実も、まるで神が『抱き心地のよい女体』というテーマで創造したかのような豊熟ぶり。

「ねえねえ、お姉ちゃん、もう……キスとか、したの？」

「ばっ。ばかなこと言わないの、愛良ちゃんったら！ まだよ、そんなこと。わたしは真ちゃんと真剣におつき合っているんだから」

「ふうーん。でも、お姉ちゃん、最近ますますきれいになってきたよねえ。やつぱり、恋をしているからなのかなあ？」

「ちよつと、いいかげんにしなさいよ。それより、愛良ちゃんはどうなの？ 気になる男の子くらいいるんでしょ？」

「え……わたしは、そういうの……」

妹は実はかなり内気だ。今こうしてフランクに話しているようには、学園の中ではふるまえていないようだった。まだ男子とデートしたこともないらしい。

それがちよつと心配で咲花は妹に無理強いして髪を栗色にカラーリングさせている。妹は恥ずかしがっているが、よく似合っていると咲花は思う。

「あ、でも、愛良ちゃん。もし、変な男子にしつこくつきまとわれて困ることがあったら、お姉ちゃんに相談しなさい。わたしが、やつつけてあげるからね！」

わつ、やつつけちゃうの？ と心配そうな顔になる妹。

咲花は、当たり前前よ、と言つて微笑みかけた。

「愛良ちゃんをちゃんと守つてあげられるような彼氏が現れるまでは、わたしが責任を持つて、ガードしてあげるから」

咲花は妹の制服の袖を引っ張つて歩き出す。

「さあ、早く行こう！」

「はい、お姉ちゃん」

もうすぐ夏休み。うだるような暑い夏は、この地方都市でももう始まっていた。

※

夏休みに入ったとたん、太陽がどこかに消えてしまったかのような曇天がつづいて

いる。肌を刺す陽射しはない代わりに風もない。蒸し風呂の中にでもいるみたいだね
つとりとした空気が不快で、佐倉愛良は顔をしかめた。

(夏ってやっぱり苦手かも……)

おっぱいの谷間が蒸れちゃう。

生理で欠席していた分の水泳の補習授業が今終わったばかり。他の生徒たちは水着の上にTシャツや学園のジャージを羽織っただけの格好で談笑しながら帰っていき、
気がついた時にはもう、更衣室に居るのは愛良一人きりになっていた。

(わたしも早く帰ろうっと)

プールの水が乾きかけの濃紺のスクール水着。といっても中学生の時のような旧型
ではない。左右のサイドに一本ずつ緑のラインが入ったシンブルな競泳型水着だ。

バスト九十三センチ、ヒップ九十一センチと発育のいい愛良のボディの凹凸は、ナ
イロン生地をぱつんぱつんにふくらませている。

それを脱ぎかけて。

どうしよう、と愛良は考えた。

(水着のまま帰るなんて、校則違反だけど……校門で先生が見張ってるわけでもない
し、みんながやっつてることなんだし)

ふだんであれば、決して愛良はそんな冒険心は起こさなかっただろう。

（水着のままって、ちよつと恥ずかしいけど……人通りのない山沿いの裏道を通っていけば誰にも会わないと思うし……）

水着の上にジャージの上衣だけを羽織ると、服を詰めたスポーツバッグを片手に、栗色の髪の高一少女は校門の外へ出た。空は一面、まるで地面にのしかかってくるかのように曇っている。遠くで雷の鳴る音がした。

（どうしよう……もし先生に知られたら、怒られちゃうのかな……でも）

更衣室に戻りかけ、しかし、引つ込み思案なHカップ女子高校生は意を決してそのまま裏道に足を踏み出した。わたしだっていつも真面目なばかりじゃないんだから、と思いつながら。自分の身にとんでもない不幸が待ち受けていることも知らずに。

※

巨体の持ち主が二人がかりだった。

一人は黒いタンクトップに、もう一人は白いTシャツに、それぞれ厚い胸板を無理やり押しこんでいる。下は揃ってジーパン。人間の男というよりも動物園の檻から脱走して服を着た二頭のゴリラに見えた。

（や！ いやああ……っ！）

林の中だ。

恐怖で声も出ない。

そんな愛良の身体から臙脂色えんじの学園のジャージが剥ぎ取られた。身を竦める女子高生せいせいの腹を白Tシャツの男が蹴きつて仰向けにさせる。黒のタンクトップの男は車から、新聞紙をくくるのに使うような白いビニール紐を持ち出した。

「へへへ。JKちゃん、いい乳してゐてえだし。味見味見」

「げへへ。もう人妻やOLは食い飽きたからな」

校門を出て数分後、山沿いの裏道で後ろから忍び寄ってきたワゴン車に愛良はいきなり引きずりこまれた。車はそのまま山の中を十分間ほど走った。また車から降ろされて、愛良は山道沿いの雑木林の中に連れていかれたのだった。

そこはちやうど学園の校舎からぐるっと回った真裏に当たるところで、運動部の選手がランニングに通りかかるとはあった。だが、その日その時間帯には周囲一帯には人っ子一人いなかった。

黒タンクトップは逃げようとする水着女子高校生の身体を取り押さえ、後ろ手にビニール紐を巻きつけた。愛良はようやく喉を振り絞るようにして悲鳴を上げた。それまでは突然の出来事に対するショックと脅えで、ろくに声すら出せずにいた。

「だ、誰か……っ、誰かたすけてっ！」

「無駄無駄」

白Tシャツがせせら笑い、黒タンクトップが栗色の髪と豊満な肢体を備えた獲物に馬乗りになる。

「へへへ。もう勃起してきた。最近抜いてなかったしな。レイプで」

「げへへ。おれも勃たつてきた。最近溜たまつてたし。レイプしてねえから」

【暴行犯】

氷室竜也ひむろたつや

二十歳 大学生

氷室拳也ひむろけんや

二十歳 大学生

二人はレイプの常習犯だった。主に人妻やOLを襲うのが好きだった。もう二十件以上の犯行を重ねていた。それでもまだ一度も捕まったことはなかった。

強引にワゴン車に乗せてひと気のないところまで連れていき、刃物を使って脅しながら強姦する。終わった後はそのまま放置するか、攫さらった場所の近くまで連れ戻してから解放する。

サツに行きたきや行ってもいいが、あんたが恥はずかしい思いをするだけだぜ、と脅しておく。それだけでよかった。被害者の女性たちは、犯罪者に罰を与えることより

も、自分が強姦された事実を夫や世間に知られることを恐れたから。

無論、この時の愛良はそんなことはおろか、相手の名前すら知らなかったが。

「たすけてえっ……！ 誰か来てえ」

「うるせえな、口塞ぐか。げへへ」

「いいや、おれは悲鳴聞きてえ。へへへ」

雑草の生えた地面に女子高校生の身体を擦りつけるようにしながら、黒いタンクトップを着けた不良大学生が獲物の首すじによだれまみれの口を寄せていく。地面と男に挟まれて、ナイロン生地一枚に守られた女子高校生の肢体は豊かな弾力を示す。

「へへへ、ぼよんぼよんしてるぜ、このJKちゃん。胸でけえよな」

「処女かな？ このボディじゃあ、さすがにそれはねえか？ げへへ」

押し倒された愛良の頭のすぐ近くでキチキチ……と音を立てて工業用の大型カッターナイフの刃を出し入れさせつつ、白Tシャツがそんなことを言った。

身体にびったりとフィットした水着の上を黒タンクトップの手のひらがいやらしく這う。体重をかけて抵抗を封じながらだ。腰骨のかたちを確かめるようにまさぐったかと思えば、そのまま上へ移って乳房にやってきた。

「すっげえ弾力？ 何カッブ？ やつべえ。おれ鼻血出そう。へへへ」

口カップの水蜜桃を水着の繊維越しに揉みしだきながら、男はうれしそうに笑う。手のひらはずいぶん大きく、愛良のたっぷりとした巨乳も驚摺みできるほどだった。ふるふるしたふくらみが岩のように硬い五本の指腹に押されてかたちを変える。

首をいやいやと左右に振り、足をばたつかせて、愛良はのしかかっている男から逃れようとした。しかし黒タンクトップは体重を利用して抵抗を封じてくる。首すじを舐めたり乳房を水着越しに揉んだりしながら。

白Tシャツがカッターの刃をかざして、暴れるなよ、と威嚇してきた。大きく突き出した乳房と豊かな尻を備えた十五歳の少女のはかない抵抗などそこまでだった。

「だよな。刃物を見せられりゃあ、たいていの女は静かになるんだよ。今までのOLちゃんたちも、みんなそうだったからな。へへへ」

「そうそう。切られたくないや静かにしてた方がいいぜ。ちよいと犯^やらせてもらえりゃあ、オッケーなんだからよ。下手に動いて怪我するより、静かにしてた方が利口だぜ？ げへへ」

これは何かの天罰だろうか？ 身体を強張らせながら、真面目な愛良はそう思ってしまった。規則を守らずに水着のまま帰ろうとしたのがいけなかったの？ 普通に替えて表の通学路を通っていればこんなことにはならなかった？

「……ああつ。いや……さわらないでえ……っ！」

「さすが、この辺で一番の名門校、南春陽学園のJKちゃんだぜ。おっぱいの揉み心地からして人妻なんかとはひと味もふた味も違う感じ。へへへ」

水着一枚に覆われただけの乳房を弄んでいた太い手指は、たっぷりとしたおっぱいの頂点にあるささやかな突起にたどり着いていた。巨漢は慣れた手つきで、ナイロンに内側からびっちり張りついた乳首を、感触を味わうようにまさぐり始める。

「や……やあつ……おかしくなっちゃ……それ、や……っ！」

「そうそう。もっとそうやって声出せや。へへへ。もっといやがり顔見せろや」

ひとさし指と親指が乳頭をしつかりと挟みこんだ。たちまち高一少女の胴と腰がぶるっ！と震える。二本の指は男女交際の経験のない少女の瑞々しい反応を愉しみながらまさぐりつづける。好奇心旺盛な幼児が新しく与えられた玩具で遊ぶかのごとく。

「へへへ。もう感じてきたんだろ。やりやりのJKちゃんよお？」

（わたし、そんなじゃない。男子とキスだって、まだしたことないのに……っ）

こり、こり、こり……男の二本の指の間からまるでそんな音が聞こえてくるかのよう。愛良の乳首は水着の中ですます硬度を増していた。乳首からおっぱいの中に向けてお湯を流しこまれているような感覚があった。

その刺激におっぱいは乳首ごと瑞々しくふるん、と弾んで相手の手指に伝えてしま
う。食い縛ろうと考えるよりも前に、口からはあはあと荒い息が洩れていた。

「はあっ……はあっ……はあっ」

左右の乳首に数分もそんなことをつづけられただけで、十五歳女子の糖菓のような
匂いのする身体からはぐったりと力が抜けていた。

黒タンクトップは胸へのまさぐりをつづけ、もう一人はカッターをかざしたまま、
少女の髪を愛おしそうにまさぐる。男たち二人もまたその呼吸は欲情で荒くなってい
た。二人ともジーンパンの中で男根をニョッキリと硬くさせていた。

(やだ……やだ……こんなのやだ……)

この時点でもまだ愛良は、この後自分が処女を奪われるということがわかってはい
なかった。鼻先にカッターナイフを突きつけられて怖いという思いと、身体をまさぐ
られて生じている未知の刺激に対する混乱があるばかり。

もしこの時、相手には傷つけたり殺したりするつもりはなく強姦することだけが目
的なのだとはつきりわかっていたなら、愛良は再度の抵抗を試みていたかもしれない。
しかし愛良はそんなことはわかっていなかった。貞操を奪われることへの恐怖より
も、異常者かもしれない男性二人に生命を脅かされている恐怖の方が大きかった。

だから。

分厚い黒タンクトップのくちびるが自分のくちびるの上にかぶさってきてても、愛良は嘔んで反抗することができなかつた。眉をぎゅつとひそめ、睫毛を震わせて、不快感に耐えることしかできなかつた。相手は調子に乗って口をぴたりとかぶせ、どろりとした濃い唾液を流しこんできた。

発達したしなやかな肉体を持つ水着姿のHカップ少女は十数秒間息を詰め、耐えきれなくなつて、男の唾液を喉の中に送りこんだ。どろどろしたなめくじのような粘液が胃に下つていく。陽灼けしていない白い喉が二回、三回、ごくりごくりと動いた。

(ねばねばして……生臭くて……気持ち悪いよお……!)

いったん目を閉じ、もう一度目を開ける。瞳に二人の男の頭と刃物と、そして曇り空が映つた。このままあの白い空に吸いこまれてどこかに行つてしまいたい、と愛良は思った。やかましい蝉の鳴き声が聞こえてくる。

こういう時は誰かが救いに現れてくれるのではないの？ でもそんな気配はなかつた。人の声も足音も車の音も、何も。男たちの靴で踏み潰された雑草から洩れた青臭い汁の匂いが唾液の匂いと混ざつて愛良の鼻を刺してくるだけ。

「なあ、JKちゃん。お前、男は知ってるか？ もう何回もやってるのか？」

己の体重の下で息づく女らしい曲線に恵まれた高校一年生女子の肢体にあらためて体重をかけ直しながら、黒タンクトップが尋ねた。

愛良は急な質問にとまどい、鼻をすすつてから、首を小さく横に振る。

「まだバージンだつてか？ そうなのか？ はつきり言えよ！ 答えろよオラ！」
カッターをゆらゆらと動かしながら白Tシャツが怒鳴る。

「おら！ 答えろつて言われたら答えるんだよ！ 嘘なんかつくなよ！」

「ほ……本当、です……まだ……」

処女なのか、と訊かれ、首を縦に動かした。

「このすつげえ身体でバージンだつてか。ケツ。嘘ついてんじゃねえよ」

黒タンクトップはベルトに差していた果物ナイフを抜いて、水着の胸元を引つ張り、縦にまつすぐ二十センチほど切り裂いた。次に繊維を力まかせに手で引き裂きにかかった。豊かなHカップのふくらみがぶるりん！ ぶるりん！ と二つ飛び出した。

この世の男という男の魂を痺れさせずにはおかないような魅惑的な巨乳。ポリウムもたつぷりなら張りもたつぷり。中身もむつちりと詰まった釣鐘型の乳房は仰向け状態の今でもきれいな曲面を保つたままだ。

「や……やだ……み、見ない、で……ください」

恐れと恥じらいの表情を浮かべて唾液まみれのくちびるを震わせる愛良。それをうれしそうに見下ろし、黒タンクトップはおっぱいにふるいついてきた。ざらざらした舌が夏の屋外の空気に触れて、いつそう硬さを増した乳首にからみつく。

「ひい……っ。熱……いつ。そんな、男の人の舐めるようなところじゃない……」

「男の人の舐めるようなところなんだよっ」

とろみのある唾液をたっぷりと吐き出しながら、男の舌が何度もねぶってくる。処女の可憐な乳首は敏感で、ひとねぶりされるたびに乳首からおっぱいの奥に向けて甘美な電流が流れた。同時に乳首はいつそうの硬直と隆起を示してしまう。

「ひいっ……いやあ……舐めないで、吸わないでえ……っ」

乳房がたふん、たふん、と揺れていつそう相手を喜ばせてしまう。伸びやかな太ももが同じように男の体重の下でうねり、男のジーパンの中の勃起を擦っていた。汗臭い男はその気持ちよさに表情をゆるめるが、愛良にはなんの自覚もない。

大きめの乳量は体積を増して小山のようにぷっくりとふくらんでしまった。その中央では、まるで糸を巻かれて強い力で引っ張られてでもいるかのように乳頭が屹立を示していた。唾液にまみれながらも、舌を弾き返そうとするほどのそのそり立ち方。

「うへへ……何この敏感さ？ ちよつとしゃぶってやっただけでこれかよ？ ほん

とにバージンかもしれねえな。おっぱいはでけえけど、こりやあどう見ても処女の乳首だぜ。見ろや拳也。このなんだか青臭い尖りっぷり。それに、この」

また舌先でぞろりと乳頭を舐めてくる。

「……ひいッ！」

「この、もぎたてみてえな新鮮な反応っぷり。へへへ」

男の言う通りだった。軽く舐められるだけで、こころがぎゅっと締めつけられて甘い汁が絞り出されるような未体験の痺れが何度も駆け抜ける。同時に背中が何かに弾かれたように数センチ浮き上がってしまう。そんな反応がまた相手を喜ばせてしまう。

「げへへ。まったくだ、兄貴。初物^{はつもの}？ やばいぜ、こいつは」

「だろ？ よっしゃ、もつと舐めてやる。へへへ」

れろり……れろり……舌がねちっこく這い回り、そのたびに高潮が押し寄せて快美な痺れが胸の奥いっばいに広がる。

「もう……やめて……ください……っ、そんなに、されたら」

懇願は無視された。蒸れた牡の匂いを放つ男は、たっぷりとした盛り上がり誇る乳房の頂点にふたたびべつとりと口を押しかぶせてきた。今度は舌でまさぐるのではなく、歯茎の内側でぐに、ぐに、と擦り上げられる。

さらに男は乳頭や乳暈ばかりかおっぱいの皮膚までいっしょに頬張り、餓えたけだもののようにしゃぶり回してきた。それによって牝の本能が目覚めでもしたのか、胸の奥を浸していた痺れが腰の芯に向かって突如、疾走した！

「……ふむんっ！」

びくびく！ 今度は背中ではなく腰が数センチ、男を持ち上げるように浮き上がった。同時に排尿の快感にも似たものが、依然として水着に守られたままの下腹部をじわりと駆け巡る。

男は右の乳房をしゃぶり回して愛良を数回うめかせたあげく、もう一方の乳房にむしゃぶりつき、同じことをしてきた。おっぱいに手を添え、根元からぐにぐにと絞り出させるようにした上で桃色突起を含み、菌茎を食いこませて擦り上げてくる！

「やだ、菌茎で、そんなことしな……むふうう！」

「うへへ。たまんねえ。JKちゃんのおっぱい。すべすべして、なめらかで……」

いったん口を離し、そうじょう相好を崩すと、レイプの常習犯は今度は指でも蹂躪してくる。

「やわらかいくせに、いやに弾力はあるやがる。おれの指を弾いてきやがるぜ。おまけにこの敏感そうな乳首ときやがった」

揉みしだく指の動きに合わせてぐにやりぐにやりとかたちを変える高一女子の乳房

肉を堪能した黒タンクトップは、ふたたび頂点の尖りに口を寄せ、ざらざらの舌で擦り上げ始めた。

「……ふウッ！」

喉の奥にねばっこく張りついたままの男の唾液を吐き出すかのように、豊かで悩ましい肢体を持った栗色の髪の女子高校生はまたうめき声を噴き出させた。予感があった。このままこれをつづけられたら自分の身体の中で何かが起こる、という予感が。

強い不安と未経験の悦楽への予兆に心臓が縮こまりながらぞくりと震えた。

それはすぐに来た。こりつと乳首を甘噛みされて左右の腰骨の奥底から同時に強烈な快美の波が湧き上がり、十五歳の子宮や膀胱が揺さぶられた。どろり、と何かが水着の股布の中で繁吹く感覚があった。一度では済まなかった。もう一度……。

「むふッ……！　むっ！　む、ふウッ……ッ！」

オナニーも未経験だったHカップ高一少女にとつて、初めて迎えた性の昂ぶりだった。乳首がヤニ臭い菌や菌茎で擦られるたびに、まるで神経が直結しているみたいに腰骨から下腹部全体にかけて甘い痺れが炸裂する。また。もう一回。これで三度目だ。

（や……やだ！　何か、出る。おしっこみたいな、でも、違うもの……出るッ！）
ぶしゅ！　かすかに、だがはつきりと音が響きわたった！

「身体、熱い……ンふううう……！」

音とともに喉が反り、ナイロン生地に張りついてかたちを浮き上がらせた陰丘が、ぶる、ぶるつ、と震えた。またもう一回来る。どろどろした温かいものが快楽を伴って体内から洩れ出す感覚。来た、あつまた！

「うぐッ……うッ……うッ……い、意識が、真っ白く、染ま……ッ！」

もう限界だと思った。快楽に不慣れな処女の肉体は今すぐここから脱げ出すことを望んだ。地面の上で腰と背中がずり動きかけた。しかし、そこまでだった。

黒タンクトップは腕と足を使っていつそうしつかりと乙女のもがきを封じこめ、その口はいっそう強く口カップおっぱいの頂点に吸いつき、しゃぶり上げてくる。菌茎どころか口腔全体を使って味わい尽くそうとでもいうかのように。

「どうした、お嬢ちゃん？ 顔真っ赤にして。汗びっしょりじゃねえか。へへへ」

処女のもがきと肢体の弾力を愉しみながら、口を離して巨体の暴行犯が尋ねてくる。そうだった。気温の高さのせいでもなく、湿度の高さのせいでもなく、暴れようとしたせいでもなく、責めに対する反応で愛良は汗を掻いていた。

つうんと辺りに甘酸っぱいような乙女独特の匂いが立ちこめる。乱れた髪も責めを受けている真っ白いおっぱいも、いつの間にか油を塗りこめたようにぬらぬらと光り

輝いていた。腹や腰も同様で、水着は内側から濡れそぼち、色を変えつつあった。

「へへへ。JKってやっぱりやべえよな。何この敏感さ。ぴっちぴちの水着がぬるぬる湿ってきたぜ。さわり心地やべえ」

そしてまた、硬直しきった乳首をなぶ蹴られる。今度は菌茎ではなく舌だった。こりこりした菌茎の硬さに慣らされてしまった直後の今は、ざらついた男の舌の感触でさえもねっとり甘美だった。抑えがたい欲情の五度目の発作に愛良は見舞われた。

頭の中が真っ白になり、男たちの揶揄の声も蝉の鳴き声もすうっと遠のいていく。あごと喉が勝手に動いて灰色の空に向かって突き出され、やはり勝手に浮き上がった腰がじりじりした悦感に灼かれて震え出す。

「うっう……うふうッ……！」

「げへへへ。おっぱいそんなに敏感なのかよ。おい？」

「しあわせな身体の持ち主みてえだな。乳首オナニーで毎晩イッてるんだろ」

見られている。恥ずかしい姿を。顔を横に向けようとしたが、うまく動かせなかった。その間にも発作はつづいていた。今度は肩までもが腰の痙攣に合わせて、びくっびくッと震えた。

下腹部を覆う競泳型スクール水着の生地は股間のふくらみにぴったりと張りつき、

桃肉の縦すじが浮き上がっている。嘖きこぼれた情欲の証はもう外側にヌルヌルと洩れ出し始めていた。なおも痙攣がつづく。

びく、びくっ……!! びく、びくっ……!!

「う。う。う……んふっ、んふうううっ!」

(見ないで……見ないで……ああつ、もういや! あ。それ、い、今は、ダメ!)

身を震わせる愛良の身体に黒タンクトップがまたふるいついてきた。思いもよらなかつた獲物の鋭敏な反応に喜び、目をそれまで以上にギラつかせている。

少女が腰や背を浮かせてぶるぶる震えるたび、いっしょに揺れる二つのおっぱい。そこにしっかりと顔やあごを押しつけ、乳頭から乳量までびったりと口で覆って舌と菌茎を使いつづける。白TシャツもHカップ少女のあごや首すじを撫で回す。

また身体が勝手におかしくなる……ああ、来た!

(もうやだあ! いやだああつ……また変になるッ!)

ごぼッ! クロツチを突き抜けてとうとう蜜汁が飛び散った。

「こんなの、初めて……ひっ、ひっ……また……やあああ!」

やだっ! なのにな!

「……あうッ……!!」

ごぼッ！ ごぼッ！ ひと気のない雑木林の中で、はちきれんばかりに実った身体をビクンビクンと震わせて、真面目で奥手だった高校一年生の少女は男の体重の下でまだ処女のまま絶頂を迎え、果てた証の痙攣をはっきりと示すのだった。

※

熊蟬の声に鳥のさえずりが重なって聞こえた。
もちろん愛良はそれに耳を傾けるゆとりなどない。

「ふう、ふうっ……はあっ、はあっ、はあっ……」

男なら誰でも息を飲んで見つめるほどに発達した少女のおっぱいから、ようやく巨体の持ち主が口を離れた。失禁したように濡れた水着の股間部分では、溢れ出た処女愛液がてらてらと布地を輝かせつつ強い匂いを放っている。

あれから十分ほどが過ぎている。その十分間で愛良は十回も果てていた。アクメ自体が生まれて初めての体験だった。それだけのぼりつめて息の上がらない娘などいるわけもない。

「お前、超敏感すぎだろ、JKちゃんよオ。男にかわいがられるのも初？ へへへ」
黒タンクトップは健康的な恥骨のふくらみをはっきりと浮かび上がらせた水着の股布部分に手を伸ばし、力まかせに引っ張って、乙女の隠すべき秘所を露わにさせる。

愛良は力なく腰をよじらせるだけで、相手を払いのける力が残ってはいなかった。

「おいおい、べつとべとじゃねえか……」

指で揉まれ、股布はぐちよぐちよと音を立てた。粘度の高い愛液がとろりと絞り出され、若さと張りに満ちた少女の足のつけ根に垂れ落ちる。へへへと笑うと太った暴行犯は股布を引っ張ったまま、晒け出された少女の股間に顔を近づけた。

「へへへ。JKちゃんのおま〇こ……腋臭みてえな生臭さだな。むんむんしてら」

「夏だしなあ。げへへ。具合はよさそうか？ 自己申告だと処女なんだろ」

白Tシャツが、まだ息の荒い愛良のあごを撫でながら言う。

高一少女の黒々とした陰毛の生え方は淡く、範囲も狭かった。大陰唇に色素の沈着はなく、そこを飾る恥毛もまばら。小陰唇も全体的に色が淡く、肌色を少し強くしたような色合い。かたちの方は成熟を示し、くつきりとした肉の扉となっていた。

「へへへ。たまたま網にかかったJKちゃんにしちゃあ、当たりすぎじゃねえか？ おっぱいはでけえし、反応もいちいちかわいすぎだし、おま〇こは清楚ときた」

巨体の不良大学生が親指と中指を使って小陰唇を左右にぱっくりと拡げると、淡い色をした粘膜が愛液の白っぽい糸を引きつつ、むんにりとその姿を現した。ほわあつと十五歳の性器臭が立ち昇る。視線だけで粘膜は脅えるようにひくついた。

「……んんっ、いやああ……見ないでください……」

ぐったりしていた愛良も、さすがに身体をばたつかせる。自分の一番恥ずかしい部分を見られているのだ。しかも、たった今、未知の刺激と興奮で何度もお漏らしに似た感覚を味わった場所。

自分でも今そこがどういう状態になっているのかわからない。もちろん処女としての恐怖心もある。ここまでくればさすがに、次に男たちが何を求めているのかは奥手な生娘きむすめにも理解はできた。

「おれ、こいつ、嫁にしたくなってきた。このおま○こに毎晩ぶちこんでやりてえ」
(に。逃げなきや……逃げなくちゃ)

「なあ、すげえことになってるぜ、JKちゃん。濡れ濡れじゃねえか。バージンじゃあ、こうは濡れねえだろっての。ま、色はイヤにきれいだがな……どれどれ、どんな味がすつかな」

黒タンクトップはまた出し抜けに顔を寄せてきた。先ほどさんざん乳首を舐つた舌とくちびるが、今度は性器に押しつけられた。すぐに、じゅる、じゅる……と音が立ち始めた。少女は腰をよじつた。

しかし男の太い腕がしっかりと膝や足を抱えこんでいる。動かそうとした肩はもう

一人に押さえつけられていた。動けない！ 女性器に口をつけられているという激しい恥辱に愛良の顔は真っ赤に染まり、涙がぼろぼろとこぼれ出る。

「うわ、意外と苦くて、しょっぱいんだな、JKちゃんの愛液……うわ、おれの口の中でまだねばねば糸引きやがる……水あめみてえだ」

「やだあ……やだあ……こんなこと……味なんて、言わないで……っ」
「こらこら。暴れんなって。どうせ逃げられねえんだからよ」

まだ誰にも見せたことのなかった桃色粘膜が舐めまくられる。小さくすぼまった膣口の上をザラついた舌が這い、尿口の上までよだれまみれにされる。

小陰唇のつけ根を内側から丹念に舌先でなぞり回され、ふっくらとしたクリトリス包皮までレロレロとねぶられる。舌先が這い上がって、包皮をめくり上げられる。愛良はもともと包皮のかぶさり方はゆるく、舌でも簡単に剥き返されてしまった。

「ひ！ や、やだあ。そ、そんなとこ……」

オナニー経験のなかった愛良には刺激が強すぎた。生まれて初めてクリトリスを男の舌でねぶられ、腰が芯から熱くなる。紙やすりのような舌に舐められるたびに、動悸が激しくなり、涙は勝手にこぼれ落ちて耳や首すじをつたう。

逃げ場を失ったまま身体の奥に残っていた熱のかたまりが、肉真珠への舌責めで突

然、炸裂した！

「……んうッ！」

また何かが繁吹く感覚があった。つづいて全身がかーっと熱くなり、毛穴という毛穴がいつせいに開いて汗が噴き出る。処女には強すぎる刺激だった。抗うすべもないままに愉悦に翻弄され、噎せかえるような牝の匂いのする愛液が洩れてしまう。

あッ、また！

「うふうん……ううッ！」

びくッ！　びくッ！　全身が歓喜にうち震える！

「なんで……おっぱいも、おしっここの出るところも、切ない……くうう！」

小さな尿道口と狭まった膣口が同時にぷくりと広がって、内側から腺液を噴きこぼす。尿道口からの匂いが強く、さらさらしたスキン腺液。膣口からは溶かした生クリームにも似た、粘度の高いとろとろの処女腺液。

愛良の場合ほどどちらも量が多く、狭い出口を割り広げて繁吹く瞬間には排尿や排便の瞬間にも似た甘く切ない放出感を伴っていた。同時に、意識を道連れにして身体全体がどこかに浮き上がるような感覚にも見舞われている。

(やだ……わたしの身体……おかしい……！)

黒タンクトップは、たまんねえな、このJKちゃん、などと言いながら嬉々とした表情で性器ねぶりをつつける。放出を終えてまたすぼまった膣口にそつと舌を挿し入れたり、剥きたてのクリトリスに思いきり吸いついてくちゅくちゅと音を立てたり。

ぐちゅ……ぐちゅ……ぐちゅ……

「たすけて誰か……お姉ちゃん、お姉ちゃん……ひうつ……ひうつ……ひうつ……」

不良大学生の唾液に愛良自身の蜜汁が混ざって陰部はぐちゃぐちゃ。淫らな舌遣い音を伴奏に愛良のうめき声が湧き起こる。温かい唾液をたっぷりとまといつかせた舌でねつとりと愛撫されて、不快感など忘れてしまうほどの鋭い喜びを伴って。

「こんな、知らない男の、人に……洩れちゃうふううッ！」

山中で弄ばれたあげくに工業用カッターナイフで殺されるのかもしれない……という恐怖心を消し去ってしまうほどに強烈な快感感が陰核の芯から膀胱の辺りに向かって疾走し、膣口と尿口はまた大量の腺液をこぼり！ と一気に吐き出した。

「ふっ、ふむうッ……ふぶむううッ！」

果てていた。愛良の精神も肉体もそれに抗う手段など持たず、ただただ従順に腰が浮き上がり、断末魔の痙攣のごとくヒクヒク震える。それでも舌責めはつづいた。

愛良はさらに二度果てた。濃い余韻が消えず、下りてこられないままに。それまで

同様唐突に。快樂への期待よりも不安を強く感じてこわばった腰が、きのうまで知ることのなかった喜びに揺れ始めて——これがまず一度目。

「こんなの、初めて……あつ……くはッ……が、はぁッ……ッ！」

背中の下でビニール紐にくくられたままの腕の先の手指を、愛良は無意識のうちにぎゅっと握りしめていた。指先が地面を搔き、爪が土を抉る。二度目が来た……。

「もう、怖いよ、こんな……ごぼふッ……ふうううッ！」

「げへへ。ずいぶん派手な声で鳴くようになってきたなあ。そんなにクンニされるのが好きなのか？ もっとやってやるよ」

「いやあ、もういやあ……つ、み、見られながら、こんなこと……！」

次がもう来た。またしてもたちまちだった。敏感になりきった肉真珠にまた刺激を与えられ、腰がまた勝手に浮き上がって硬直し、ぶる！ ぶる！ と震え出す。

「もう無理な……んんがはッ！ はッ！ んんうううひむううう……！」

アクメを告げる甘ったるい悲鳴が山あいにも木霊した。裂けかけた水着をまとった豊乳女子高生は六十秒の間に四度も頂点に突き上げられた。意識を失わなかったのは、指先の爪の間に小石が入りこんでひりひりと痛んでいたからに過ぎなかった。

ようやくその四度目の昂ぶりの波が引いてきた。うめいたはずみに唾液が逆流し、

鼻の穴と喉の中間にからみついて残っていた。愛良は咳きこんだ。

「……ごほ、つほ……つく、つはあ……はあ」

性器が吐き出した愛液の匂いが草いきれと唾液の匂いに混ざってぷうんと、その鼻腔を刺してきた。酸味を強くしたよだれのような匂い。

愛良が相手の行為から快感を得られていられたのは、ここまですだった。

「さてと。これだけ^{よろ}歡ばせてやったんだ。そろそろ頂くとするか。どうせバーজনなんかじゃねえだろうがな。へへへ」

下品に笑うと、黒タンクトップはジーパンとトランクスを下ろして下半身裸になった。醜悪としか思えない肉棒がニョッキリと姿を見せる。まつたけのようなかたちの傘は先走りの汁に濡れててらてらと光っていた。

それを見て、瑞々しい肢体の持ち主はきやつと小さく悲鳴を上げた。まだ重い身体をよじって起き上がろうとする。そっくりの顔をしたもう一人が、逃げんじゃねえよと言って華奢な肩を押さえつけ直した。

「やつぱり、エッチはナマの中出しに限るよな。JKちゃんだってその方がうれしいだろう。へへへ」

上半身だけ水着を剥き返された半裸の高一巨乳少女の足を片手で掴むと、元に戻り

かけていた水着の股布部分を引っ張ってずらし、黒タンクトップは十五歳の性器をあらためて剥き出しにさせる。

すりすり……閉じかけの二枚の小陰唇の上を数回上下に擦っただけで、肉棒は膨張の度合いをいっそう増した。幹の太さや雁部分の径など、愛良の手首くらいはある。

漲りきって唾液をどろどろとまといつかせたままの肉真珠が、硬直した亀頭の先でツンと突かれた。肉真珠は弾力を示してぷるつと震え、亀頭を跳ね返す。それだけでもまたジーン……という刺激に愛良は襲われた。それでも今は恐怖が上回っていた。

「なあ、JKちゃん、言えよ。かわいがってくださいってな。あたしの身体をどうか好きなようにしてくださいってな。あたしで気持ちよくなってくださいってな」

太ももがガツシリと抱え直される。黒タンクトップは腰を進めてきた。小陰唇を亀頭が左右にかき分け、クリーム状の愛液にまみれながらもなお小さく口をすぼめている膣口にしつかりとあてがわれる。

（やだ！ やだ！ こわい……それだけは、やだ！）

縛り方がきつくはなかつたのか、手首のビニール紐は解けかかっていた。しかしそれを見越しているかのように、白Tシャツが愛良の肩を押さえつけて逃亡を防いでいる。這いずることもできない。両足の爪先が攀ったようにぶるぶると震えた。恐くて。

どくつ……。

「……むふう！」

膣口を亀頭でくすぐられた刺激だけでも、感じやすくなっている処女の肉体は果蜜を迸らせる。ちりちりした刺激が腰骨に走りもした。けれど。今度は全身を揉み抜かれるような快感には程遠かった。

入口を無理やり押しこむようにして亀頭が埋没してくる。巨体の暴行者に焦りはないようだった。こういうことに慣れているのか、あくまでもじっくりと進めてくる。処女の本能がもう一度、這いずってでも逃げろと命令していた。

「熱^あつつう……JKちゃん、すげえ熱いな、こいつは……」

黒タンクトップは感心したような声を出す。亀頭は半分くらいが埋まり、また止まった。ことばとは裏腹に獲物が処女だとうに見抜き、じっくりいたぶろうと思っているのか。それとも単に焦らそうとしているのか。愛良にはわからない。

「なあJKちゃん、てめえも愉しみゃあいいんだよ。欲しいんだろ？ 素直になれ」

身動きもままならない状態で一寸刻みに鬨り抜かれるようなこの状態は、愛良には精神的にも厳しい。入口付近での浅いストロークだけを数回繰り返され、たわわな乳房を持った高一少女は恐怖と恥辱で胸がいっぱいになり、すすり泣いていた。

「なんだよ。何泣いてんだ。待ちきれねえってか」

(ち……違う……違う……わたし、初めてだから……)

ことばにならない。

「ようし、そろそろ奥まで挿れてやるぜ。そんなに待ちきれないんならな。強姦じゃあねえよな。もう。なあ、おっぱいちゃん？　へへへ」

愛良はヒッと息を詰めた。

巨体の暴行者はストロークの幅を長くしてきた。亀頭の埋まりこむ体積が徐々に広がってくる。膣口の粘膜がはつきりと亀頭の硬さを感じ取っていた。弾力は有しているようだけれど、芯に硬さがあるように思えた。たとえばコルクに似ていると思った。無理だ！　と愛良は思った。そんな凶器がこれ以上入ってこられるわけがない！

(や、やだ！　いちばん、太い、ところが……やだ無理！)

恐怖心から身体を固くした、次の瞬間。

「太すぎ、無理——んううう……！」

膣内に進んできた亀頭を自分の中の何かが阻むのがわかった。亀頭の動きが止まった。愛良はうなった。もうこの時点で自分の膣は限界まで亀頭に押し上げられているように思えた。その恐怖ゆえのうなり声だった。もう、いっばいいいっばいいだという。

「……ぐッ、や、だ」

たつぷりとしたおっぱいを持った夏休みの高一少女は喉の奥から苦悶の声を絞り出した。太ももが自然に動き、相手を振りほどこうとした。しかし黒タンクトップは逆にしつかりとそれを抱え直し、ますます下腹部を押しつけてくる。

「……くうう……無理、なの、に……ッ」

「なんだ、てめえ、このキツさ……ほ、ほんとに、バージンだつてか……？」

黒タンクトップは顔中に汗を浮かべていた。恐怖による処女の緊縮ぶりに驚嘆し、爆ぜさせそうになるのを必死で抑えこんでいる表情。

愛良もまた顔といわず、身体中に脂汗を流していた。乙女の膺の中のいそぎんちゃく状の処女ひだの一枚一枚が亀頭に熱くからみついていた。もう逃げられないということを知ったのが悟ったのか、意志に反して十五歳の腰はもう動いてはくれなかった。

「い。痛い……ッ！」

こより状に束ねたサランラップが強引に引き裂かれたような音がした。一回。もう一回。処女ひだがあめくり返され無理やり裂かれていく音だった。

「処女膜か、これ……すげえ熱いひだひだがかからみついてきやがる……すげえ」

「痛い」

愛良は苦痛を訴える。肉棒がなかば以上埋まっていた。最後まで裂けきれずに残った膣の天井側の太い処女ひだが、強引に入りこんでくる亀頭の雁に引っかかって千切れた。その瞬間、引き締まった腰と健康的に実ったお尻の持ち主はまた悲鳴を發した。
(や、やだ、擦れて……引つ張られて……痛い！)

愛良は泣いていた。気持ちよりも先に肉体的な痛みの方が大きかった。

「へへへ……JKちゃんのバージョンもらったぜ……すげえ圧迫だ……」

「……やあ……動かさ、ないで……こ、わ……れ……う……っ！」

いったんは抵抗を諦めていた腰がつらさに耐えかねて一回、二回、左右によじれる。だが太ももをがっちり抱えこまれている状態では、それくらいの動きではどうにもならない。むしろ動いたことで逆に結合は深まつてしまった。

(こ、こんなのが……わたしの、初体験だなんて……っ)

初物膣の具合を堪能しなくては損とばかりに、黒タンクトップはゆつくりとねじるように腰を動かす。圧迫感と包みこまれる感じを同時に愉しんでいるようだ。次に体重をしっかりとかけて、奥まで埋めこもうとしてくる。たちまち。

「そ、そんな、は、入ってき——い、っ……うぐうう……っ！」

愛良は十五歳の少女らしからぬ重いうめき声を吐いた。

伸縮性を有しているとはいえ、ふだんは小さくすばまっている肉粘膜の輪が、強引に肉の凶器で拡張されているのだ。未経験のその感覚に加えて、処女ひだの最も太かった一枚の、その根元部分が雁に引きずられてさらに裂け、新たに痛みを発していた。「やああ……う、痛い。痛いよう……痛いよう……う、う」

「ばかやろう。処女だったからって、甘えんなよ。ロストバージンの痛みなんざあ、一瞬だろうが……そ、それにしても、狭くてキツいな、てめえ……きっちきちの輪っかにおれのちんぽがびっちり包まれてやがるぜ……へへへ、たまんねえ」

巨漢は文句を言いつつも、十五歳の熱い緊縮ぶりには満足そうに息を吐く。

「おっ……JKちゃんのおま○こ肉がズキズキ脈打ってる……へへへ、これこれ」

そう言うって瞳をいやらしく輝かせ、痛みに震える十五歳の膣肉の圧迫を楽しみながら身体の中の脈動も味わっている。肉と肉が繋がって初めてわかることだった。ぼんやりとしか性行為を空想したことなかった高一少女には思ってもみないことだった。「気持ちいいんだろ、JKちゃん？ ええ？ なんとか言ってみろや。げへへ」

白Tシャツの方は、悩ましい若い肉体が身動きしなくなったと見るやいなや、たぶたぶのおっぱいをむにりと揉み始めた。今の愛良にはそうされているという感覚がなかった。陵辱されている苦痛と恥辱だけで意識がほとんどオーバーヒートしていた。



第三章 散花無慘

無事に文化祭も終わった、その翌日。咲花は一年生の教室に向かった。

Fカップの美麗な乳房とかたちのよい丸いお尻は、歩くだけでも夏用の制服の薄地になまめかしい曲線を浮き上がらせる。そんな上級生を一年生の男子も女子もまぶしそうに見つめるが、咲花は先日のもので頭がいっぱい。

「ちよつといいかしら、明日香さん」

目当ての下級生を見つけ、教室から連れ出した。

廊下の隅で二人きりになったとたん、明日香は不機嫌そうな顔になった。腕組みをし、冷たい視線を向けてくる。上級生に対する下級生の態度ではなかった。

「……いったいなんの用？ あたし忙しいんだけど」

「ねえ、取引しましょう。この前のことは警察にも学園の先生方にも黙ってる。非常ベルは生徒が誤って押したことで片づいたみたいだし。このままわたしが黙っていれば、あなたたちがしたことは明るみには出ないわ」

だからその代わり、と咲花は一年生の目を正面から見つめ、口にする。

「撮影した写真や映像を渡して欲しいの。それでおたがい、今回のことはなかったことにしましょう。それでどう？」

返ってきたのは嘲笑だった。

「先輩……あなた、ばかなんじゃないの？」

「なんですって？」

「だってそうじゃない。だいたい何よ取引って。そんな虫のいいこと言える立場だと思ってるの？ 写真でも映像でも、あたしや兄さんたちの顔にはボカシ入ってるよ。公開されて困るのはそっちで、あたしたちは痛くもかゆくもないんだからさあ」

「そんなことはないわ！ きつと立派に犯罪の証拠になる。あなたたちは加害者。流出させるのは勝手だけれど、追い詰められるのもあなたたちなのよ。わたしだって妹だって、罰を与えるためなら、恥ずかしい思いをしたって全然かまわないのよ」

最後のことはははったりだったが、明日香は考えこむ顔つきになった。

そこで咲花はたたみかける。

「もちろん、恥ずかしい思いをしなくて済むならその方がいいわ。だから取引しましょうって言うてるの。悪い話じゃないはずよ。あなたのお兄さんたちだって、釈放されて早々なんだから、もう今回みたいなのコネや融通は利かないんじゃないかしら？」

「……ちよつと待つて。青熊さんと相談してみる」

明日香は携帯電話を取り出して、通話を始めた。

咲花はこころの中で祈つた。どうかあのやくざ者がこの話に乗ってくれますように、と。難しいかもしれないとも思った。今口にした理屈に一応、破綻はないはずだったが、客観的に見れば咲花が口先だけでこの娘から画像と映像を巻き上げようとしているとも取れるのだから。

「……わかつたわ」

通話を終えた明日香は、市の郊外に位置する再開発予定地区の名称を口にした。

「今日は半日授業だし、午後三時にそこに来てくれる？ 青熊さんは取引に応じるって。あの人も出所したばかりだから、今はどこからも訴えられたくはないみたいよ」

よかつたね、咲花先輩、あんたの勝ちよ——と言いつつ、金髪の下級生は自分の教室に戻つていった。

※

市の公会堂を過ぎ、町を南北に貫く川にかかる鉄橋を越えようと、数百メートルにわたつて農地がつづく。第三セクター化した後、結局廃線になった路線バスの停留所跡の先が三叉路になり、右手に進めば、ゴーストビレッジと呼ばれる再開発予定地区だ。

市内でもともと過疎化の進んでいた地域だったが、平成の始めに在日〇軍の基地が移転してきたことが住民の流出に拍車をかけた。

今は廃屋と化した民家や商店が並んでいる。旧国道と県道との交差点を通り過ぎ、五十メートルほど進んだところに、指定されたビルがあった。コンクリート打ちっ放しの荒涼とした外観を見たとき咲花は漠然と不安に襲われ、ぶるっと肢体を震わせた。

（大丈夫……大丈夫よ）

自分に言い聞かせ、廃墟に足を踏み入れる。

エレベーターは当然壊れていた。階段で四階に上がる。

「……遅かったわね、咲花先輩」

最も奥の部屋。何に使われていたのかもわからない無個性な内装だった。壁も天井も外壁と同じで剥き出しのコンクリート。奥の方にはなぜか安っぽいパイプベッドがあったが、錆だらけだ。それに体育館にあったのと同じようなパイプ椅子。

あのやくざ者はいなかった。咲花と同じ制服姿の明日香がいる。坊主頭の双子もいた。今日も黒のタンクトップと白のTシャツという姿だった。わざとかもしれない。

「約束が……」

違う、と言いかけて、ことばを飲みこんだ。こんな奴らはどうせ約束など守るわけがない。そもそも咲花自身が青熊と通話して約束したわけでもない。

(何か企んでるだろうと、思っただけだ……)

「これはどういうこと？」

相手三人を睨みつける。

「なあお姉ちゃん。お姉ちゃんが犯らせてくれたら、妹ちゃんの撮影データは全部返してやってもいいんだぜ」

案の定、そんなことを言い出す黒タンクトップ。名前は竜也といったか。

(冗談じゃないわ……!)

こんな奴らなんか指一本さわられたくはない。それに。信用できるわけもない。

竜也はにやにや笑って近寄ってくる。手には三十センチほどのピアノ線があった。

「へへへ。ここじゃあ、姉ちゃんの武器になるような棒つきれなんざあねえからな。この前みてえな目には、もう遭わねえぜ」

咲花の蹴りを警戒しているのだろう。じりじりと壁際に追い詰めてくる。

「おら、な？ 抱かせろや。この前のつづき、しようぜ」

咲花は後ずさりしながら通学鞆を開け、用意してきたスタンガンを手にとった。あ

る事件をきっかけに、護身用として入手したものだ。ピアノ線で首を絞めようと襲いかかってきた相手にそのまま押し当て、スイッチを入れる。

「な、なんだそりゃ……ぐおおっ？」

バリバリバリッ……！ 竜也を昏倒させるにはその一撃で済んだ。

「てめえ！ 上等じゃねえかつ」

もう一人を倒すには少し手間取った。一撃目は避けられ、髪を握られて壁面に肩から叩きつけられた。殴りかかってくるのを膝を曲げてかわし、子猫のように足元を擦り抜けながら、背中へ電撃をお見舞いしてやった。

「げえええっ……」

悲鳴を上げて拳也も昏倒した。

咲花はスタンガンのスイッチを入れたまま、痩せぎすの一年生に向き直る。

「さあ。撮影したデータを全部わたしに渡すか、消去するって約束して。そして、わたしやわたしの妹の周りをこの人たちが二度とうろろしないって約束させて頂戴」
スタンガンをかざして咲花は迫る。

「う……あんた、反則だろ。そんなもの、持ってたのかい……」

「そんなこと言えって言ってるんじゃないわ！ 約束しなさいって言ってるの！」

「ちよ、ちよつと待つてよ……話せばわかるわ」

「問答無用よッ！」

咲花がふだん誰にも聞かせたことのない厳しい声を張り上げた、その時。

「そこまでだよ。残念だったな、かつこいいお姉ちゃん」

声が出た。明日香の表情がたちまちゆるんだ。瞳に安堵と尊敬の色が溢れる。

「青熊さん……」

「え——」

ゆっくりと振り向き、咲花は息を飲んだ。スーツ姿のあのやくざ者が、開襟シャツと学生ズボン姿のボーイフレンドにナイフを突きつけながら立っていた。

「ククク」

「ごめん……咲花ちゃん……」

（真くんが、どうして、ここに……）

ある程度は想像できた。心配してくれて、真はそつと後を尾けてきたのだろう。この前のようにまた助けることができるのではないかと思つて。

しかし今回はそれが裏目に出ってしまった。室内の様子を窺っていたら、遅れてやつてきた青熊にあつさり捕まつてしまった。そんなところだろう。

「この坊やに怪我させたくなかったら、その物騒なもんを明日香くんに渡しな」
真の頬に刃先を当て、怖い声で凄む青熊。

「うふふ。もう少しだったのにね、先輩」

明日香は咲花の手からスタンガンを奪うと、なんの躊躇もなく脇腹に当ててきた。

「……っ！」

凄まじい衝撃に貫かれ、Fカップ女子高校生の意識は闇に呑みこまれた。

※

気がついたら身動きを封じられていた。マットレスすら乗っていない錆びたパイプベッドの上で両手両足をそれぞれ支柱に手錠で繋がれ、Xのかたちに手足を伸ばした格好にされている。着衣はそのままだが靴だけは脱がされていた。

先ほどと同じ、剥き出しのコンクリートで囲まれたあの部屋だ。

「ちよつと！ これはどういうことよ！」

「どうもこうもないわ。ただ、あたしは、咲花先輩にあたしの頼みを聞いて欲しいっただけ。でも先輩ったら、いきなりこんなもの持ち出して攻撃するんだもん」

明日香が咲花のスタンガンを手にしてそう言う。すっかり余裕を取り戻している。

「怖くって、お話にもなんにもならないから、手足を固定させてもらったってわけ。

うふふ。これならおたがい、落ち着いてお話ができるんじゃないかしら、先輩？」

「話って何よ？ わたしは、たとえどんなことをされたって、あなたたちの言いなりになんか、ならないんだから！」

腕と足に力をこめてみる。だが手錠はおもちゃではなく本格的なものらしかった。もかく咲花を見下ろして、じたばたしたって無駄無駄、と明日香が笑う。

「それに、うふふ。別に言いなりになんかさせようとは思ってないわよ、こっちだつて。ただ咲花先輩には、ちよいと来月、パーティーに参加して欲しいだけなの」

「……パーティー？」

「おお。そうさ」

青熊の声が聞こえた。

咲花が顔を向けると、パイプ椅子に縛りつけられた真の横でスパスパとタバコを喫すいながら、中年のやくざ者は説明を始めた。それによると――。

隣の市の繁華街に今度できるクラブで、秘密パーティーを行うらしい。明日香と双子は青熊に声をかけられて運営の手伝いをしており、きのう愛良に使われたドラッグも、もともとそこで売買するために青熊があるルートから調達したようだ。

「うふふ。咲花先輩と愛良先輩にはぜひそこで、売りをやって欲しいんだ。そうです

よね、青熊さん？」

「おお、そうだ。ククク」

いやらしい目で囚われ状態の高三少女を見つめながら、青熊がうなずく。

「お前らのような美人高校生姉妹が売りをやるとなりやあ、客もわんさと呼べる」

そりゃいいっすね、と言って双子まで笑い出す。

「じよ、冗談じゃないわ！ そんなの、いやに決まってるでしょう！」

早く手足の手錠を外してよ！ と咲花はわめいた。映像や画像を返してもらおう取引のために来たはずなのにどうしてこんなことになってしまったのか、理解できなかった。外してよ！ 外しなさい！ と繰り返す。

「ちよつとちよつと、咲花先輩ったら、あんた、自分の今の立場、わかってる？ そんな命令口調が許されるとでも、思ってる？」

まあいいわとつぶやき、金髪の一年生は自分のくちびるをぺろりと舐めた。

「じゃあ、ちよおつとあたしが先輩をリラックスさせてあ、げ、る。もう少し落ち着けば、先輩も青熊さんの提案に耳を貸してくれるかもしれないからね」

「リ、リラックスって、何よ！ 耳を貸すって何によ！ そんなことに、なるわけないでしょう！」

「ねえ、咲花先輩。あたし、この前から気になってしかたがなかったんだよねえ」

何がよ！ と怒鳴るように訊き返すと、先輩のそのきれいな顔がよがるところを見たいのよねえ、と落ち着いた声で不良娘は答えるのだった。

「愛良先輩もいい顔になって、甘くていい声聞かせてくれたけどさ。咲花先輩みたいにキリッとした美人がよがったらどんな感じになるのか、どんな顔になるのか、すごく興味あるんだよねえ、あたし。うふふ」

「そんな顔になんか、わたしが、なるわけないでしょう！」

明日香はわざとらしくため息をついた。

「ふうん……じゃあ、試してみる？ このあたしの責めに耐えて、最後までイカなかつたら、愛良先輩がレイプされてる動画くらいは返してあげてもいいかも。うふふ」
「責めって何よ？ 耐えるって何によ？ 何ばかなこと言ってるのよ！ あなたの言うことなんて、今さら信用できるわけないでしょう！ 取引に応じるとか嘘ついて、わたしをここにおびき出したくせに！」

「あのなあ、JKのお姉ちゃん。選べる立場じゃあないって明日香くんがさつきから言ってるだろう。人質がいること、忘れるなよ。ククク」

青熊がかざすナイフの先には、椅子に縛られたボーイフレンドの顔がある。

ことを返せなくなって黙りこんだ咲花に、明日香がまた声をかけてきた。

「うふふ。先輩がスタンガンなんか用意してきたのと同じで、あたしだって最初からこうするつもりで、色々用意してきたんだから」

明日香は自分のスポーツバッグから取り出したものを、一つずつ咲花に見せつける。爪楊枝。マチ針。面相筆。ハサミ。刷毛。ハンディー型電動按摩器。この前愛良に使われていたのと同じピンクのローター。ペニスを模つた真つ黒なバイブローター。

「あんたは、まずこれでかわいがってあげる。じつくりとね。うふふ。ローターみたいないいものを簡単に使ってもらえるだなんて、思わないことね」

そう言つて明日香が手に取つたのは、ハサミ。

「あ、あなた……明日香さん。こんなことは、犯罪行為よ！ わかつてるの？ 人の自由を奪つて何かしようだなんて……！」

「何言つてるのよ。取引を持ちかけてきたのは、そもそもそつちじゃない。うふふ」

早熟な十七歳の肢体は夏のセーラー服とスカートに守られている。均整の取れた百六十二センチの肢体。バスト八十九センチ、ウエスト五十八センチ、ヒップは八十五センチ。ベッドの上で仰向けの今も、細めの肢体に似合わないほどの見事に整った果実型の乳房のかたちが、制服とブラの繊維越しにもしつかりと現れている。

金髪の一年生はそんな咲花の目の前で、ものを切る真似を繰り返した。チョコキンチョコキンと音を立てさせて。

「ちよ、ちよっと……何するつもり？」

さすがに身の危険を感じ、咲花はもう一度全身に力をこめてみる。手首や足首に手錠が食いこむ痛みをこらえ、鎖部分を引き千切れないものかとがんばってみる。

数分後。無駄だと悟らざるをえなかった。額に薄く汗を浮かべて荒い呼吸に胸を上下させる黒髪の高校三年生女子を、明日香が冷酷に見下ろす。

「……暴れるのはそれで気が済んだ？ うふふ」

「はあ……はあ、はあ」

明日香は生け贄のそばに歩み寄るといったんハサミは置き、前開き式のセーラー服のファスナーに手を伸ばしてきた。一気に下ろされる。あつという間にブラジャーが露出した。張り若さをいっばいに漲らせた乳房はブラカップの中で息づいている。

「うふ。いい身体してるのねえ。うらやましい。イク時も気持ちいいんだろうなあ」

明日香の瞳が残酷そうな光を帯びて光った。不良一年生は高三女子のセーラー服からスカーフを抜き取り、そのまま制服を左右に完全にはだけさせる。

「さつきみたいに暴れようとしないう方がいいよ、先輩。怪我するよ」

一年生は今度は制服のスカートを脱がしにかかった。こちらはファスナーを下ろすのではなく、ハサミでいきなりジョキジョキと切り裂き始めた。肌が露出する羞恥心に手足をばたつかせかけたが、刃物に対する恐怖で身体はすぐに凍んでしまう。

スッ……わざとなのか、偶然か、スカートを解体していくハサミの刃が時折、太ももに当たる。表情をこわばらせながらも咲花は訴えかけてみた。

「明日香、さん……こんなこととして、わたしが黙っているからそれで済むだなんて思っているんじゃないでしょうね……!」

「おお、怖い。先輩こそ、いつまでもそんな威勢のいいこと言っていられるだなんて、思わない方がいいんじゃない? それに、ジツとしてないと、マジで怪我するよ」

明日香はザクザクとハサミを使いつづけた。ウエストのゴムの部分に力をこめてブチンと切り裂くと、布きれとなつてしまったスカートを咲花のお尻の下から引つ張り、取り除く。とうとう下半身はショーツと靴下だけにされてしまった。

十七歳の胴はきれいにくびれ、逆に腰骨はみつちりと豊かに張り出している。まるで将来の安産を約束でもされているかのように。剥き出しになった二本の太ももはむちむちしているが、同時に引き締まってもいる。十代の瑞々しさの中にしつかりと熟した魅力も詰めこんだ肉感的な生足だった。

「ねえ先輩。オナニーはよくするの？ そりゃあするわよねえ。週五回？ 六回？」
「し……知らないわよっ」

咲花はオナニーの経験はもちろんある。いや、ひよつとしたら自分は性欲が普通の女子高生より強いのではないかと悩むことすらあった。吉田真とつき合うようになってから、そんな思いはますます強くなっていた。ある理由から、まだキスすら許していないわけだが……。

「何よ。色気のないのをしてるのね……高二にもなつて。クラブで売りをやる時には、もう少しエロいの穿いてきてよね」

咲花のショートツを見下ろしながら、明日香がばかにしたような口調でそう言う。

剣道部員の咲花は動きやすさと吸汗性を重視したシンプルなショートツを身につけることが多い。今穿いているのもそうだった。綿素材の清楚な薄布は下腹部にぴったりと密着して、うっすらとだが陰阜や肉唇の縁のかたちを浮き上がらせている。

明日香はハサミの刃先を、ふっくらと盛り上がったヴィーナスの丘の真上にそっと押し当て、ゆっくりと縦になぞった。

(ううっ……っ)

「先輩、答えてよ。オナニーは週何回？ 道具使う？ 指だけ？ いつまでもとぼけ

るつもりなら、身体に直接訊くことになるよ。まあ最初からそのつもりだけどね」
こういう風にね、と言って明日香はハサミを持っていない方の指で、咲花の贅肉の
まったくくない引き締まった脇腹をつまんだ。それも力いっぱい。

(い、痛いっ……)

でも弱音を吐くのはくやしすぎる。どんなことをされても反応など見せまいと口を
つぐみ、金髪の下級生を睨みつける。だが明日香も恐れるそぶりは見せない。ぎゅう
ぎゅうと指に力をこめてくる。意地の張り合いの様相を呈してきた。

「あら、咲花先輩は痛みには強いのかしら？ うふふ。まあいいわ」

それじゃあ、と言いながら明日香はまたくちびるをぺろりと舐めた。

「痛みには耐えられても、快樂には耐えられるかしら？ 咲花先輩？ うふふ」

「な、何を……」

金髪の下級生は刃先を白い素朴なブラカップに触れさせ、ゆっくりと動かし始めた。
中身のおっぱいのかたちや弾力を確かめるかのように、カップの縁の部分から円を描
きながら少しずつ、そろりそろりとなぞってくる。まるで愛撫でもするように。

これくらいのこと、いちいち反応を見せるわけにはいかなかった。何を言っても
無駄かもしれないとも思い、もう一度口を閉じる。もちろん下級生を睨みつける眼光

の強さはそのまま。

明日香はまたハサミを置き、今度は顔を寄せてきた。ブラカップに包まれた乳房をふもとから持ち上げるように手を添え、鼻息がかかるほどカップに口元を近づける。

「じつくりと、じーじつくりと、咲花先輩を追い詰めてあげる」

不気味に笑い、たっぷりと実った十七歳の乳房を包む化繊に、はむっと口をつけた。
(きや……っ)

悲鳴を上げかけて、なんとか咲花はそれを抑えた。反応を見せたら相手を調子に乗るだけだろうと思う——だが。

ブラ繊維越しにねちっこく胸果肉をしゃぶられて、息はすぐに上がり始めてしまう。はあはあという吐息が食い縛ったくちびるの隙間から喘ぎ声のように洩れるのに、そんな時間に時間がかからなかった。

明日香はそのことに気づいているはずなのに、じつくりとしたブラカップしゃぶりをそのままつづける。先ほどのハサミの動きをなぞり直すかのように、ふもと部分からゆつくりと円を描くように舐め上げ、少しずつふくらみの頂点に向かってくる。

指で咲花の脇腹や胴のくびれをソロソロと撫で回しながらだ。口腔とヌメヌメした舌からはたっぷりと唾液が吐き出され、それがブラカップの球面を覆い尽くしていく。

(うっ……ど、どうしよう……無理やりなのに、乱暴ではないなんて……)

咲花の全身の産毛が逆立っていく。金髪少女の唾液は繊維に染みこみ、中に詰まった乳房を濡らし始めていた。それとは別に乳房と乳房の谷間に汗が浮き始めてもいる。まだ好きな男子には一度もさわらせたことがない乳首が勝手に尖りきって、濡れたブラカップの繊維の内側にスリスリと擦れてしまう。

そのむず痒いような、切なくなってくるような感覚がたまらなかった。明日香は相変わらずマイペースに、やさしいとすらいえるやり方でブラカップを万遍なく唾液まみれにしてくる。たっぷり十分近くもそんなことをつづけられて――。

「ねえ、もう、やめてよ……」

咲花は沈黙しつづけることができなくなり、そう訴えていた。

乳首はジワジワした刺激によってもう、ブラの内側でぷくりと盛り上がっていた。咲花の声を聞くとそれを合図のように明日香は口を開き、左側のブラカップ越しに乳首突起を含んできた。まずくちびるの先がちゃんと触れ、咲花が刺激に、うっと喉の中でうめいた直後、口の中にブラの繊維ごとグミのような乳首が呑みこまれていた。

(ああっ……ああっ。そ、そんな温かい口の中に含まれたら……っ)

声は抑える。まだ大丈夫だと思った。ただ、身悶えは抑えられなかった。舌のひと

舐めごとに腰は勝手によじれてしまう。口は閉じていても鼻声のようなものが洩れてしまうのも止められない。

「うわあーっ。先輩のおっぱい、むにむにして、たまんなーい」

明日香は吐き出した唾液をたつぷりとまぶしながら、舌で繊維越しに乳首愛撫を繰り返す。同時にもう一方の手は右の胸を弄んできた。やはりブラカップの上から、くすぐるように乳首をまさぐるのだ。

（んっ……んんう……か、感じてなんかいない……反応もしてない……してるとしたら、ただの筋肉の反射運動なんだから……それだけだから！）

前をはだけた白いセーラー服の中で咲花の肩がひくつき、剥き出しになった細い胴もまた、明日香のしゃぶる音に合わせるかのようにブルッ、ブルッ、と震えてしまう。乳房の谷間に浮いていたのと同じような汗が、鼻の頭にも浮き始めていた。

ブラ舐めをしばらく繰り返した後で、明日香は不意に口を離して言う。

「言っとくけど、咲花先輩には、愛良先輩に使ったみたいなドラッグなんかは使わないよ。先輩はいやらしい牝の本能だけで墮ちるんだから」

「そ、そんなことに、なるわけないって、言ってるでしょう！」

と。視界に双子が入ってきた。それぞれカメラやビデオカメラを持っている。

「へへへ……おれ、才能あるのかな。てらてらのブラがいいアングルで入ってる」

「ちよ、ちよっと！ 撮影なんてやめさせて！」

咲花がそう言っても明日香は冷たい声で応じるだけ。

「どうして？ 反応しないんなら、別にいいじゃない」

「く……っ」

ブラを剥き出し。スカートも奪われている姿だ。思春期の娘としては今の姿を記録されるだけでも、大変な恥辱だった。咲花の中には脅えもはつきりとあった。下着も外されてしまうのではないかという脅えだけではない。自らの肉体がこれ以上の反応を示してしまうのではないのかという、漠然とした脅えがあった。

金髪の一年生はあくまでもじつくりと責めてくる。

「先輩の方からああしてこうしてっておねだりするまで、これつづけましょうか？」

「ば、ばかなこと言わないで！ おねだりなんて絶対、しないわよ……っ」

「ふうーん。そう？ だんだんいい顔になってきてるくせに」

明日香は右のブラカップを口につけ、左側と同じように丹念に舐め始めた。すぐはこちらも唾液でべとべとになっていく。今度は左の乳房が指で弄ばれ始める。

ブラカップの繊維ごと、尖りきった乳首をつまんだり撫でたり引っ張ったりされる。

その責めに、弾力とやわらかさをたたえた肢体は弱々しくくねって反応を示してしま
う。うっ……うっ……と、泣き声みたいな鼻声も洩れ始めていた。

(ううっ……こんなはずじゃあ……)

乳首をブラ越しにべとべとにされるだけの刺激でも、腰から膝にかけての力がすつ
と抜けていくのがわかった。ばたつかせようとしてもうまく力が入らなくなっていた。
「さ……咲花ちゃん、しっかりするんだ！ 負けるな！」

(真くん……)

不意に呼びかけられて、手錠の先で咲花はぐつと指を握りしめ直す。そうだ、と思
った。これくらいのことでは負けてはいけない、と。だが。

「てめえは黙ってな」

青熊がナイフを振るって真の髪を少し切った。次は頬にするか？ 腹にするか？
と訊かれ、咲花のボーイフレンドは口をつぐんだ。

一方咲花は、そんな真の視線を気にしながら、こう思う。

(いいんだわ。反応さえしなきゃ。どんな恥ずかしい目に遭わされたって、わたしは
被害者。手足の自由がないんだから、どう考えたってこいつらが犯罪を行っている様
子の映像でしかない。怖がることなんかないわ。わたしは堂々としていればいい)

しかし。

「……うっ」

急に不良少女の口と舌の責めが激しくなったのだ。口や舌ではなく今度は歯を使つてブラ越しに甘噛みしたり、歯茎と歯茎で器用に挟んでコリコリと力をこめてきたり。かと思つと一転してまた舌先でのやわらかな愛撫に戻つたりと、技巧が尽くされ始めていた。咲花は再度洩れそうになつてしまふ声を、眉間に皺を刻んでなんとか抑える。すると再度、歯茎でコリッと噛みつかれた。

(……うっ。それ、だめ……んうっ……!)

感じやすくなっている時のブラ越しの歯の刺激は気持ちよかつた。反応を抑えこもつとすることでかえつて、首とあごの動きや足腰の微妙なよじれという反応となつて表れてしまう。びくびくっ。びくっ。

「これくらいのこと、負けたりなんか、しない……んっ……んうっ……ッ」

「ふん、ブラ越しなのに、この反応、すごいよね。これで直接おっぱい責めてあげたらどうなるか……待つことないか! 今すぐ確かめちゃおうつと。うふふっ」

明日香はふたたびハサミを手に取り、カップとカップの間に差しこんでプツリと切断した。ストラップはそのままに、刃先ですつすつとカップだけずらしていく。

(や——やだ)

撮影されていること以上に、真にも見られてしまうのが恥ずかしかった。

「見ないで……真くん」

思わずそう口走っていた。そんなことを口にしたらむしろ青熊たちを喜ばせるだけであることくらい、わかっていたはずなのに。

「見るんだよ。てめえの彼女のおっぱい、しっかり見てやんな。へへへ。まだ見たことなかったってか？ 目、つぶったりするなよ。生きてここから降りたかったらな」

青熊はそう言ってサバイバルナイフで真を脅す。

(やだよ……見ないで、真くん……)

咲花の方が目をつぶり、恋人から顔をそむける。それでも、その場にいる全員が熱い視線を感じた。もちろん真は咲花の望み通りに、目をつぶろうとは思っているはずだった。脅されて仕方なく見つめているだけのはずだった。

「うわあつ。ブラ越しでも、ここまで乳首ビンビンになっちゃってたんだあ、先輩。すぐーく感じやすいんだねえ。媚薬なんかーんにも使っていないだよ。うふふ」

くやしいが、明日香のことばの通りだった。豊かな胸果肉の先端は持ち主である咲花本人がそれまで見たこともないほどに屹立していた。乳暈はまるで小ぶりの乳房の

ように盛り上がり、その中央からは乳頭がコチコチに硬くなつて天井を向いている。乳量も乳頭もブラから浸透してきた唾液にまみれてねっとり光っている。

「くふっ。やらしい乳首。でも、咲花先輩の将来の旦那さんがうらやましいかも。エッチする時、こんなエロい乳首を好きだけ自由になれるだなんてね」

すでに獲物の陥落を確信してでもいるのか、明日香は相変わらず性急な責めはしてこない。わざと咲花の顔の上に戻って自分の舌を見せつけてから、たっぷりと唾液をその舌に乗せ、出し抜けに首すじにその舌を這わせる。

「ああっ……いやっ！」

さんざん胸ばかりを責められたあげくの、突然の首すじへの愛撫。温かい乳房と発達した腰をぶるつと震わせて、咲花は声を上げていた。

「ええ？ いやっ、つて言ったの今？ 何がいや、なの、先輩？ ねえねえ」

「……う、うるさいわねえ。そんなこと言つてないわよ！」

「あらそう。まあいいわ。すぐに、もつと素直にさせてあげるから」

冷たく言い放つと、明日香はまた舌をねろねろと這わせてきた。薄紫がかつた舌の先は微妙なザラつきを持っていて、敏感な首すじの血管の上をそろりそろりとなぞらると、そのたびにヒリついた刺激が走る。感受性の豊かな肉体を持った十代の女子と

しては、それだけのことで、うめき声を上げずにはいられない。

「わたしはこんなことで屈したりなんか——う。あつ」

（嘘……いつもと、違う……オナニーする時より、ぜんぜん、感じちやってる……）

まださわられてもいない下腹部が熱い。蒸したように熱がこもっている感じだった。首すじへの責めに呼応するように太ももまでヒクヒク震えてしまう。

「うッ……もう、やめ、なさい……こんなこと……うッ」

「まあだ命令口調なの？ 呆れた。強情ねえ」

首が弱点だとわかってうれしそうに笑うと、不良娘は仰向けの咲花の上に覆いかぶさるようにして、右に左にと交互にキスを繰り返し始めた。こつてりと、ねつとりと、たつぷりと、唾液を吐き出しながら舌で責めつづける。

清廉な女子高校生の首すじから鎖骨によってできた胸元のくぼみ、そして肉房に向かうゆるやかな皮膚の表面までもがすぐに唾液でてらてらと光り始め、生臭い匂いをもうもうと放ち始める。

（て、手足が自由ならこんな子、突き飛ばすか蹴り飛ばすかするの……うううッ）

責められるしかなすすべもない女子高校生のうめき声が徐々に諦めの色を濃くしつつ空気の中を漂い、廃ビルの一室を満たし始めていく。と。

「……む、胸はもういやっ！」

思わず声を上げてしまった。突然だったのだ。明日香の舌がFカップのミルクタンクに移ったのが。すでにブラ越しでの刺激と首すじ責めの刺激で尖りに尖りきっていった乳首に、また新たに唾液が浴びせかけられるのが。

明日香は自らの塗りたくった唾液がまるで乳首から分泌された母乳でもあるかのように口を含み、思いきり吸い上げてくる。おっぱいの芯まで明日香の唾液が染みこみ、胸の骨や肺の中までもが征服されてしまうのではないかと思えるほど。

「あー、なんか咲花先輩の乳首も、おっぱいの肌も、甘いわあ……」

目をとろんとさせてそんなことを言いながら不良娘は、柔媚な胸果実から締まった脇腹にまでキスの雨を降らせてくる。さらに。それまで完全に放置していた股間に指を伸ばしてきた。ひとさし指の爪の先でつーつとショーツの股布部分を撫でられる。

「……ふっうッ！」

それだけで咲花はビクン！ と身体を弾ませて重いうめき声を洩らしてしまった。黒い瞳に薄く涙を浮かべ、整った鼻梁にはつきりと汗を浮かべながら。

「あらあ？ この色気のないパンティ、もう中からぐっしよりじゃん。やだあ」

今度は明日香は太ももの内側をぺたぺたとさわわりまくる。ぶるっ、ぶるっ、とまた

太ももや腰がうろたえたように震えた。

「ふうッ……さっ、さわるなっ！」

「あらっ。まだそんな威勢のいい声出せるんだ？」

ショーツに触れられたのはまだ一回だけだった。ふたたびもがき始めた咲花の膝から足のつけ根にかけてを明日香はいやらしく撫で回す。もがくといつても、両足首をそれぞれ手錠でベッドのパイプに繋がれているのだからおのおのずと限度がある。

う、う、とうめいて生汗を噴き出させながら身をよじる、負けず嫌いなFカップ女子高校生。太ももがうねり、ブラカップを外された二つのおっぱいがゆさゆさ揺れる。その様子を撮影しながら双子が音を立てて生唾を飲みこんでいた。

「うふふ。ここをかわいがって欲しいんでしょ？」

また明日香の指がショーツの上を這ってきた。

ここまでに受けた刺激ですでに内側から濡れてかたちを浮き上がらせている十七歳女子の生殖器。そこを明日香は万遍なく愛撫し始めた。

ふっくらと体積を増して花開きつつある小陰唇の幅や厚みを確かめるかのように、恥骨の高さや張り出し具合を確かめるかのように、丹念に指腹で撫でられる。その刺激でまた勝手に粘膜が分泌してしまうひそやかな蜜汁をショーツの股布越しにすくい

取り、もう一度粘膜や陰唇に塗りこみ直してくる。実に丁寧かつねちっこい。

性器の上を万遍なく擦られていたかと思うと、今度はもう一方の手がそろそろと陰毛の上をまさぐってきた。すでに汗で地肌から濡れている黒い繁みが、湿った布を挟んでざりざりと擦られる。慈しんですらいるかのように。

「うふふ。陰毛の生えっぷりも立派なんじゃない？ 恥骨も張り出してるし、立派な上つきみたいだし」

指は陰毛の上を滑り、左右に花開きかけているふつくらとした二枚の小陰唇が一つに合わさっていく性器のとは口部分の根元を、そつと指圧するように押さえてきた。クリトリスをしつかりと覆った包皮の、その根元のあたりだ。

瑞々しい果実のような肢体を備えた十七歳の女子高校生にとつての、そこは急所だった。刺激に弱すぎてクリトリス包皮をまだ剥いたことのない咲花が、ふだんのオナニーでさわり慣れているのが、その包皮の根元周りだった。

（ううっ……よりによって、そこは）

あの武骨そうな双子や凶悪な面構えのやくざ者にショーツの上から愛撫されても、ここまで快感を覚えるとはとても思えない。けれど。明日香の指は十代なかばの女子ならではの細さとやわらかさを備えていた。その上でここまで落ち着いた態度でソフ

トに愛撫を繰り返されては、たまらない。

あつという間にショーツの生地はまるで失禁でもしたみたいに濡れ、かたちどころか小陰唇と小陰唇の間から覗く粘膜の桃色さえも透かして見せるようになっていた。女性器がその周縁全体を含めて充血でもしたみたいにはかほかと熱くなっていた。

「どうしたの、先輩？ 顔まで真っ赤よ。てか、腋の下まで汗でべとべとじゃない」「し、知らないわよ……」

そう言い返す声からして、拒絶の色合いだけでなく、どこかしら諦めにも似た色合いを帯びてしまっているのが自分でもわかる……。

「先輩、そんなに暑いのか？ もっと脱ぐ？ 脱ぎたくてしょうがないんでしょう？」
明日香はいきなり指でショーツの縁を握りしめると、くしゃくしゃに丸めるようにしながら下ろしにかかった。

「い、いやあつ！」

全身を震わせるようにして上げた悲鳴は無視されて、無情にもショーツは下腹部から離れていく。股布の内側には白みがかかった粘液がべつとりと付着し、陰唇の隙間から糸を引いて繋がっていた。

明日香はそれを指先ですくい取った。ぬらぬらと光る粘液を舐めて顔をしかめる。

「うわ、苦あつ。先輩、あんた、おりものも多いでしょう？」

「……………」

咲花は困惑と羞恥で答えられなかった。

「今度はだんまり？ うふふふ。わかりやすいパターン踏みすぎだよ、咲花先輩。もっと愉しませてよ」

膝のあたりまで下がったショーツはハサミで切り取られてしまった。坊主頭の双子は十七歳女子の股の間に陣取ってカメラを向けてくる。咲花がどれだけ両足に力をこめても、股を閉じることがはかなわなかった。

(撮らないで……………み……………見ないで……………せめて真くんだけは)

さいわい真や青熊のいる位置からは、そうはつきりとは見えないはずだが……………。

「さあさあ兄さんたち。あたしに場所を空けてくれる？ これからがいちばん楽しくなるんだから。うふふっ」

うれしそうに笑うと明日香は、ひとさし指となか指とくすり指と小指を開きかけの二枚の肉びらの上にあてがい、やさしくマッサージするように撫で始めた。

「……………う……………こんなこと、つづけ、られたら」

白い足の先の指が、ぶるっ、ぶるっつと寒けを感じたように震える。感じているのは、

無論、寒けではない。むしろ逆のもの。咲花は眉根を寄せ、反応など見せまいとする。（うう、オナニーとは全然違う。他人にさわられるのが、こんなにすごいだなんて）

「どうしたの、先輩？ まだ何か我慢しようっての？ 今までのオナニーなんかじゃ感じなかったようないい気持ちになってきてるんじゃないの？ 身を任せちゃえばいいじゃない。クラブで売りをしてもらう話の詰めもしなくちゃいけないけど、そういう面倒なことは、イッた後にしてあげる。あたしってやさしいでしょう？」

不良娘は指腹で二枚の小陰唇のすぐ脇を、愛おしむようにコツテリと揉み始めた。咲花の意志に反してそのやわらかい部分は、相手の冷たく硬い指腹に吸いつくような反応を見せ、咲花自身の体内にも甘やかな波動をつたえてくる――。

（冗談じゃないわ！ この子の好きなように弄ばれてなんか、やるものか！）

何をされても反応など見せないから！

黒い寶石のような瞳とやわらかい花卉のようなくちびるを持った女子高校生はその思いを強くした。

けれど。明日香は咲花が根負けするのを待っているかのように、じつくりじつくりとした撫で方を変えない。少しずつさわるポイントをずらし、時に少しだけクリトリス包皮に近いところを撫でる。かと思うと小陰唇をそつとつまんで指で挟み、なぞり

上げてくる。

そのたびに咲花の身体はいちいち反応し、一瞬ビクッと震えたり一瞬だけすーっと脱力したりしてしまふ。それを何回も繰り返されるに及んで咲花はすすり泣き始めてしまつた。

「うふふ。周りだけでは物足りないの、男勝りの強い咲花先輩？」

明日香の指が不意に肉びらを越えて膣前庭にやってきた。ちょうど尿口の上あたり。「……ふっう！」

豊かな起伏を備えた十七歳の肢体が、手足の自由のないままにうねつた。お腹や太ももの筋肉が浮き出し、引き攣つたように震えた。ふんわっ……腰から身体が宙吊りにでもされるような浮揚感があつた。

「くう……あッふ……ッ！」

それでも咲花はそれ以上の声は押しとどめた。それ以上の肉体の反応も意志で無理やり抑えこんだ。浮揚感は消え、高波はしばらくしてゆるやかに退いていつてくれる。

「はあ……はあ……」

今頃になつてまたどつと汗が噴き出たが、とにかく最悪の事態だけはとりあえず迎えずに済んだ。撮影までされているのに、果ててしまうなどという恥を晒すわけには

いかなかった。仮に最後まで耐えられたとしてもそれで何事もなく帰れるとはもう思えなかったが、とにかく耐えきることが咲花の意地だった。

明日香がフン、と鼻を鳴らす。

「結構がんばるのね」

「かまわん。今の調子で、つづけてやんな」

青熊が言う。口調は落ち着いているが、目は双子同様にギラギラしている。

「はい、青熊さん」

無邪気とすらいえる調子で返事をしてから明日香は、じゃあここいっちゃおうかなあ、と指を伸ばしてきた。クリトリス包皮に。片手の指で包皮の根元部分をグッと押さえつけ、もう一方の手が肉真珠をしっかりと覆った包皮を剥きにかかる。

これには咲花もあわてた。

「や……や……いや、そこだめ——あ、痛いっ！」

「あら？ 先輩のここ、ずいぶん口が狭くて……剥きにくい。ていうか、ひよつとして剥いたことなかった？」

痛がる獲物の悲鳴に楽しそうに耳を傾けながら、明日香は包皮を強引にめくり上げてくる。神経が集まった敏感すぎる器官が剥き出しにされていく。恐怖と嫌悪でにわ

かに鳥肌が立った。

「や、やめて……：……：……：……あ、あ、くッ、くあ……：……ッ」

とうとう完全に包皮から露出させられてしまった。生まれて初めてだった。咲花は人一倍クリトリスが大きい。それに比して包皮口は極端に小さい。

だから無理やり剥き返された今は包皮口がクリトリスの根元近くをぎゅうぎゅうと締めつけてしまっている。それがまた刺激となって肉色の真珠玉は熱くジンジンと反応し、もう限界までふくらんでしまっていた。その状態のまま、ぶるん、ぶるん、と脈を打つように震えた。

「い……：……：……：……痛い……：……：……締め、つけ、られて……：……：……痛っ」

「ちよっ。臭い。臭い。はしたないお豆ちゃんだわねえ。一度も洗ったことないんだ？」
大豆大の肉真珠全体が黄ばんだ恥垢にべつとりと覆われ、チーズのような強い臭気を放っている。

いきなりそこに触れようとはせず、この期に及んで、ひとさし指となか指で包皮のつけ根あたりから挟むようにして、明日香はクリトリスの根元に刺激を与え始めた。

根元の裏の敏感な部分への巧みな指圧だ。クリトリスをますます包皮から絞り出させるような力がこもっている。それでもまだ肉の珠玉自体には触れてはこない。

「さわって欲しい？ それとも舐めて欲しい？」

「いや。ダメだから——そこ、わたし敏感すぎてさわれないから……ね、おねがい」

「ハッ！ やつと弱音を吐き始めたね。だけど、あんた、さつきあたしに問答無用とか言ったよね。同じことばを返してやるよ。問答無用だっつの」

指で触れられる。

「……くッ……!!」

ぐつと歯を食い縛る。それを見て明日香は不快そうに鼻を鳴らした。

「ふん。まだがんばる？ 呆れた」

「どうだ？ お前の彼女があんなにくやしそうな顔になってるぜ。あんなに汗を掻いているぜ。見たことあったか？ くくく」

「……咲花ちゃん」

「見ないで！ 真くん！ おねがい」

「見るんだよ」

青熊がすぐむ。しばらくして、真の謝る声が咲花の耳に届いた。

「……ごめん、咲花ちゃん」

(……く)

見られている。見られているのだ……。

「うふふふっ」

恥垢に覆われた肉豆の表面に明日香が口をつけてきた。お臭いと言いながらもとてもうれしそうな声だ。唾液を含ませた口で吸い上げられる。とたんに腰やお尻が同極の磁石を近づけられた磁石のようにベッドから浮き上がった。

咲花の喉もぐぐぐ……と反る。喉がちょうど天井を向き、そのまま震え出す。

「……うんむ……ッ！」

ぶる！　ぶるっ！　咲花はまだ必死で口を引き結んでいた。声はほとんど洩れていないはずだった。しかし。

その場にいる全員に明白だった。十七歳の肉体に快楽の電流がたつぷりと迸り、充分すぎるほどの激しいアクメに見舞われている、ということが。咲花本人もわかっていた。自分は感じていることを隠しきれていない、ということが。

「……むう……むうふ……むううふッ……ッ」

黒髪からねばついた汗のしずくを撒き散らし、背中をのけ反らせて咲花は高原よりも高いところを舞っていた。せり上がった腰はそのままひく、ひく、ひく、と短く鋭い痙攣を繰り返した。それでもまだ声は可能な限り抑えていた。必死の克己心で。

だが金髪の不良少女は今度は前歯と、ねろねろとした舌で挟んで刺激してきた。

「……………んぐうふううッ！」

びくびくびく……………！ 十七歳の下腹部の方が明日香の顔に向かってせり上がり、抱きついているように、傍目には見えただろう。

しかも。明日香がゆつくりと口を離してもまだオーガズムはつづいていた。離れぎわにふうつと息を吹きかけられただけでも、強すぎる喜びが迸って全身を駆け巡る！それは余韻ではなかった。骨まで溶けるような熱い快感に身体が貫かれていた！

「……………や、まだ——んふううッ……………」

甘い果汁をいっぱい含んだ果実が腰の奥の方で連続して破裂するような、凄まじい快感が連続して炸裂し、ようやく絶頂の波は退いていった……………。

ごとり、と浮いていた腰と背中が金属製のベッドに落ちた。

「……………はあ、はあ、はあ、はあ」

鮮烈な快感は消えていき、その代わりに強い恥辱と悔恨がやってきた。

（だ、だめだったのに……………我慢しなきゃ、だめだったのに……………）

「おお不味っ。最低の味。こういう不潔なの、男の子には一発できらわれると思うんだけどな……………男の子はこういう匂い、意外と好きだったりするのかな？」

舌やくちびるについた咲花の恥垢を手の甲で拭ってから、明日香がばかにしたように声をかけてくる。

「さてさて。ねえ咲花先輩。イッたでしょ、今？」

「……ち、違いわ！」

「ちよつとお。嘘言つてんじゃないよ。あたしをばかにしないでよ。イッたかどうかくらい、わかるさ。同じ女なんだからさ。ていうか、誰が見たってイッてたけどお」

同じ質問が繰り返される。意地悪く。

「先輩、今、イッたんでしょ？ どうだった？ よかった？」

「……………」

黙りこんで顔を横に向ける咲花。答える義理などない。

明日香は呆れた顔になって、ため息をつく。

「まただんまり？ あーあ、一回イッたくらいじゃあ、まだ生意気なままか……まあいいわ。もつとかわいがつてあげるから」

でもその前に、と言つて明日香は咲花の顔にきびだらけの顔を寄せてきた。黒髪を撫で、もう片方の手ではかたちのよいあごをさすってくる。

「うふふふ。イカせてあげたんだから、キスくらいもうかまわないよね？」

くちびるがゆつくりと近づいてくる。

「い……いやあつ」

視界いっぱい相手の顔が近寄り、背後が見えなくなった。それは突然といつてよかつた。忌まわしい記憶が甦り、こころの奥に刻みこまれていた恐怖心が強く噴き出した。咲花は汗でねとねとの黒髪を振り乱し、いや！ いや！ とさけぶ。

「ちよ。急にどうしたの。耳や首まで真っ赤にさせて、絶叫なんかしちやつて？」

「……いやなの、もういやなの、そんなの……ッ！」

「ありやりや。なんか、変なスイッチが急に入っちゃった？」

明日香はいったん、そのにきび顔を離した。

「どうした」

青熊も不審そうに声をかけてくる。金髪の一年生は咲花を見つめながら、ははあ、とつぶやいた。

「先輩、さんざん強気なこと言ってたくせに……なんかイヤな思い出でもあるわけ？好きでもない男に無理やりファーストキスを奪われたとか？」

（ううっ……！）

恋人の前で知られなくなかったことをはつきり告げられて、裸に剥かれたFカップ

女子高校生は顔色を失っていた。

「凶星みたいだね。うふふ——青熊さん、この女、期待以上にいたぶり甲斐がありそうですねですよ。何か面白い男性遍歴でもあるみたい。捨てられたのか、捨てたのかは、これから白状させるけど」

明日香はにんまりと笑みを浮かべた。

※

『佐倉咲花の回想』

それは妹の愛良が学園の裏山で強姦された事件のおよそ二か月後——昨年の九月、金曜日の放課後のことだった。二学期の中間試験も近いため、女子剣道部の稽古は早めに終わった。できるかぎり野球部の真といっしょに帰ることにしていた咲花だが、その日は下校時間が合わず、一人だった。

ひと気のない通学路の角を曲がったところで咲花の耳に甲高いブレーキ音が響いた。ジープは下校途中の女子高校生の行く手を塞ぐように半分歩道に乗り上げてから停止した。ドアが開き、二本の太い腕に上着の襟と袖を引っ張られて後部座席に乗せられた。あつという間の出来事だった。

ジープは二十分ほど走り、咲花はどこかの倉庫に連れこまれた。湿った木材の香り

とガソリンの匂いが鼻についた。男性用香水の匂いと、隠しきれない強い体臭も。

【在日〇軍兵】

ジョー・ウィルスン 二十九歳 黒人兵

ポール・ブラウン 二十八歳 白人兵

部活後の咲花はTシャツの上に薄地のトレーニンングウェアを羽織り、体育の時間に穿くびっちりしたカルソンパンツの上にトレパンを重ね穿きしていた。残暑はまだ厳しく、下着はとうに汗で湿って匂いを放っていた。

咲花は暴れた。声は出なかった。テレビドラマなどで襲われそうになるヒロインが悲鳴を上げたりするのは嘘だったとわかった。本当に襲われて怖い時に悲鳴なんて出るわけがない。

抱きかかえていた鞆を奪われ、Tシャツが引き千切られ、ブラジャーを外された。

黒人は薄く静脈を透かした乳房と薄く脂汗にまみれた素肌を持つ女子高校生の腰の上に坐りこんで体重をかけたまま、両手を使って乳房を一つずつ鷲掴みにしてきた。咲花は眉間に皺を寄せた。男の体重の下でわずかに胴がくねったが、まだ声の出せない状態がつづいていた。

黒人には手加減というものがなかった。痣ができるのではないかと思うほどに十本

の指でこねくり回された。黒人はつらさにゆがむ日本人少女の表情に嗜虐欲を満足させられているのか、うれしそうに暴虐をつづけた。

十六歳の乳房はその頃すでにお椀型のFカップに実り、むにむにとした手触りを有していた。たっぷりとした量感も。

相手の異様な興奮ぶりが怖く、咲花は悪寒しか感じていなかった。未経験の咲花には、ここまで性的な興奮に囚われた男性の様子など見たことはなかった。

(こ、こわい……男の人って、こうなの……本当はみんなこうなの……?)

咲花は思った。人間扱いされていないと。性欲や好奇心を満足させるためだけの下等な動物として扱われていると。

黒人は咲花のくちびるに口を寄せてきた。ものすごい力で髪とあごを押さえつけながら。閉じようとするくちびるとくちびるが強引にこじ開けられ、生レバーのような黒人の舌が入りこんできた。

(やだ……臭くて、気持ち悪い……ッ)

噛んで反抗しようと思った矢先、いったん舌は退いた。頬に痛みが走り、目の奥に火花の散る感覚があった。それからまた肉質の異物がぬるぬると侵入してきた。また殴られるのが怖くて、歯を使うことはもうできなくなっていた。

(息……苦しく……うう)

黒人の厚いくちびるに、咲花の薄桃色のくちびるが擦られた。そのまま相手の歯で千切られるのではないかと思った。

(キスって、キスって、男からの暴力でしかないじゃない……っ！)

さんざん口の中にどろどろした唾液を流しこんだあげく、ようやく黒人は口を離し、今度は熱い素肌を備えた女子高校生の耳元に顔を寄せてきた。

「しゃぶらせてください、と、言え」

日本語で命令された。黙っていると、言え！ と怒鳴られた。咲花の口が、しゃぶらせてください、と動いたのを見届けると、黒人はにやりと笑った。

そいつはチャックを下ろし、すでに怒張っていたペニスを引っ張り出した。赤黒いトマトのような亀頭を備えた信じられないほどにグロテスクな肉棒が視界に入った。黒人は咲花にまた命令した。さあ早くやれ、と。

咲花は従う——振りをした。

ペニスに歯を立てる勇氣はなかった。その代わりに、もじやもじやと密生した陰毛にかじりつき、思いきり引っ張ってやった。黒人は悲鳴を上げた。さらに咲花は、そいつのたるみのある腹をかかとで蹴ってやった。

何か英語で罵声を上げながら掴みかかってきたもう一人に対しては、咄嗟に鞆を拾い上げ、振り回した。金具のついた角が相手の顔にヒットした。咲花はトレーニングウェアで前を隠しながら倉庫の外へ出た。

必死に走って逃げた。さいわい倉庫街はすぐに途切れ、少ないながらも商店の建ち並ぶ通りに出た。兵士たちはそこまでは追ってこなかった。

咲花はこのことを届け出るべきかどうか迷った。

もしこの件が報道されたとしたら、口さがないマスコミやネットに自分のことが知れ渡ってしまい、ねじ曲がった報道をされてしまうかもしれない、と思った。つき合いはじめた吉田真に知られ、誤解されてしまうのは特に怖かった。

結局、誰にも打ち明けられないままに日々は過ぎた。忌まわしい記憶は日々を重ねても薄れていくことはなかった。

下半身の純潔こそ守れたが、もう自分は純粹無垢ではないのだ、と咲花は思った。それくらい、あの黒人兵士によるくちびるへの陵辱はハードだった。

思い知らされていた。肉の交わりというものが、ぼんやりと夢想していたロマンティックなものではなく、汗や唾液やその他の分泌液、それに体臭や垢や雲脂や体脂を触れ合わせ擦り合わせるものなのだということを。

※

「うふふ。ねえ咲花先輩。じゃあ、性の遍歴、語っていただきましょうか。肉びらの伸長具合からすると、そんなに経験重ねてるわけでもない感じだけど。どんな初体験だったの？ 相手は誰？ あたしが知ってる人だったりする？」

「ち……い、言えるわけないでしょう……」

「なんでよ？ 何そんなにうろたえてんのよ。あつ、そっか。無垢じゃないこと、隠してつき合ってたんだね、吉田先輩と。うふふ。嘘つきの咲花先輩をもっと素直にさせて、ぜーんぶ告白させてあげる」

明日香は直径三センチほどの球が二十センチくらいの長さの棒状に繋がったものを手にとった。それに何かのクリームをべたべたと塗りつける。

「アナル棒よ。オ○ナインで滑りをよくしてあげるから。あたしってやさしいな」

明日香はそれを咲花の小さな肛門に少しずつ埋めこんできた。

「そ、そんなの、無理……やめ、やめなさ……うっう！」

数分かかってとうとう根元まで入れられてしまった。もちろん痛みと違和感しかなかった。それに身体を串刺しにされてしまったかのような無力感にも囚われる。

（ど、どうして、わたし、こんな目にばかり遭わなきゃいけないの？ 去年あんなこ

とがあつたばかりなのに！)

そう思うのは、しかし、まだ早かつた。うずらの卵くらいの大きさのビー玉をバツグから取り出すと、不良少女は咲花の膣に指を使って無理やり押しこみ始めた。

「い、いやだ、い——ぐう……痛、い……」

熱湯のようなものが膣内に広がる感覚があつた。破瓜の血液だ。ぶちっ。ぶちっ。

「咲花ちゃんっ」

「み……見ないで……真くん……っ。真くんだけは見ないでっ……痛い」

骨盤の中や子宮の近くで血が沸騰でもしていたような苦痛の瞬間がしばらくつづいた。一個目につづいて明日香は二個目のビー玉を挿入し、同じように無理やり中に押しこんでくる。何かが炸裂したような痛みをまた感じた。ぶちっ——。

(真くんに、言いたかつた……『痛い』って。真くんにだけ言いたかつたのに……)

まさかこんなかたちで処女を喪うことになるだなんて、思つてもいなかった。男性との性行為に対する恐怖はやがて薄れ、自分はたぶん真くんを相手に初体験することになるのだと、そう思つていた。それなのに……。

明日香が抜き取つた指には、裂傷を負つた処女ひだから噴き出た血がべつとりとこびりついていた。痩せぎすの不良少女は意外そうな顔になる。

「ええっ？ 痛がつてる振りじゃなくて、マジで処女だったんだ？ あたしはてつきり、先輩の初体験話を告白してもらえるんだとばかり、思ってたんだけどなあ」

まあいいや、と明日香は笑う。

「先輩のバージンを奪ったのは、あたしの指とビー玉なんだよね！ ああ愉快だ！ しかも、吉田先輩の見てる前でだよ！ あはははっ！」

金髪の不良娘は三個目のビー玉を埋めこんできた。膣肉は内側から強引に掂げられ、「ククク。見ろや、坊主。お前の彼女のバージン、二度と戻ってこねえみてえだな」

「咲花ちゃん……咲花ちゃん……」

失望したような、恋人の声。それとも心配してくれているのだろうか。

（こ、こんなの、ひどい……ひどすぎる……）

恐怖心だけで激しく収縮し痙攣してしまう。咲花は顔をしかめた。

「く、苦しい……もう、やめ、て……っ」

ところが破瓜の痛みは長つづきはしなかった。さんざん濡れていたせいかもしれない。三つの硬いビー玉の表面で圧迫を受けて粘膜はおののくように震えつづけ、ジトリと新たな愛液の分泌が始まってしまった。

「あ、あ、あ。痛いのが、痺れて、きて……こ、こんなこと……」

（う、嘘……こ、こんな奥に何か感じるところがあるなんて……）

「どうしたの先輩。感じているの？ ロストバージンしたばっかりなのに」

「ち、違う」

誰にも見られたくなくて顔を反対側に向けようとしても、アナル棒で串刺し状態にされてもいる今は、そうする余裕すらなかった。

ぐり、ぐり、ぐり、ぐり……指先で三つのビー玉が押しこまれ、振動が与えられる。それは絶妙な強さの圧迫だった。咲花が今の今まで存在していることすら自覚していなかったGスポットがはつきりと厚みを増し、火照り始めていた。腰をよじって快感をどこかに逃がそうとしてもどこにも逃げてはくれそうにない。

「く、くっ」

（だめよ……こんなことまでされて、感じるわけにはいかない。自分を抑えなきゃ）

「うふふ。次はこれを使ってあげる」

明日香が手にしたのはバイブレーターだった。最初に見せられた、男根をシンプルに模したものはまるで違う。元のかたちは男性器だが、たくさんのイボや小突起がついたそれは、空想上のモンスターか何かの触手にしか見えない。

「い、いや、そんなものを、まさか、いやよっ」

「何よ。ちよつと前まで、あれだけ突つ張つてたのに、いやとかかわいいこと言い出しちゃって？　かわいいこぶつてんじゃないよ、今さら」

「い、いやよ、そんなの、こわい……っ！」

ビー玉を三つも呑みこまされてもなお、またすぐに口を狭く閉ざした可憐な膣口。そこを無理やり割り開いて触手パイプが挿入される。一度イッたことで潤みが充分だったせいも、怖がる咲花の態度とは裏腹に意外にすんなり、膣はパイプを含んでしまった。明日香はグリッップを掴み、深く押しこんでくる。

「ねえ、じゃあ、どうしてさつきはあんなにうろたえたの？　そんなにキスにいやな思い出があるわけ？　ねえねえ。あたし知りたいな」

パイプに押されたビー玉は膣粘膜を内側から膀胱のあたりに向けてグツ、グツ、と押し上げ圧迫してくる。そのたびに熱い悦感がひりひりと胎内に走り、たまらず咲花は自由の利かない身体を可能な限りくねらせた。膣肉はパイプの突起にもしなしなと反応を見せる。小陰唇は性具を迎え入れるかのように左右に開ききつていた――。

「先輩、感じてるわけではないんですよ？　違うって言ったもんね。その割には、んん？　どうしたの、そのいい顔は？　眉なんかだんだんハの字になってきたし」

恋人の見ている前で感じてしまっている黒髪の美少女高校生にわざとそういう言い

方をしながら、鬼畜な不良少女は巧みにバイブを操り始めた。

「あつ。あつ……つ」

たまらなかった。

とく。とく。とく……我慢できないほどの熱い波が腰の中からこみ上がってきた。バイブに生えたたくさんのイボイボに肉ひだが擦られる。ビー玉にはGスポットをこりこりと圧迫されつづけている。熱波が胎内でうねった。恥毛もまた毛根から熱を孕み、絶え間のないむず痒さを持ち主の神経に送りこんでくる。

「もう感じ始めてる？ マジで？ そんなことないよねえ、咲花先輩？」

「あ、当たり前でしょう……」

「……はいはい。てか嘘つくんじゃないよ。感じてるんでしよう、ねえ咲花先輩？」

「か……感じてなんか、いない……つ」

小刻みにバイブを動かされるたびに、愛液でねっとり濡れた膣内に万遍なく刺激を与えられる。Gスポットへの圧迫に加え、深くまで入りこんだビー玉が子宮頸部に隠れた第二の快感ポイントまで刺激し出した。もちろん今日の今日までそこにスイートスポットが潜んでいたなんて咲花は知らなかった。

「ほらほら。どうしたの？ なにそのつらそうな顔。もつとグリグリして欲しい？」

「だ、ダメ……っううう」

手首足首を固定されたままの咲花の背中が、走り高跳びの選手がバーを越える瞬間のようにのけ反った。膣粘膜は根元近くまで埋めこまれたバイブをしつかりと締めつけていた。ビー玉が子宮頸部縁のスポットを擦り上げるのに合わせて、豊かな乳を持った高校三年生女子はくぐもった悲鳴を上げ、そのゴージャスな裸身をよじらせる。

「だ。だめっ……もう、許、して」

とうとう咲花はそんなことばを口にしてしまっていた。言わずにはいられなかった。
(あ。あ。あ、い……イク)

ビクビクビク……ッ！ 腰骨全体が熱っぽく、ひく！ ひく！ と痙攣する！
「う……っぐッふううッ！」

声は抑えなかった。でも無理だった。口を閉じようとしても勝手に喉から嬌声が噴き上がってしまう。均整の取れた身体はがくがく震えてしまう。手錠で繋がれた足の先では足指までもが硬直し反り返って、一秒、二秒……ぶる、ぶる、とわなないた。

「ふん、ロストバージョンした直後にイカないよ、普通は。やつぱり牝犬だったね」

呆れたように言う明日香。十七歳のFカップボディがゆつくりと絶頂から降りてくるのを興味深そうに眺めつつ、二の腕の内側をそつと撫でたり、たっぷりとした乳房

の上で円を描くように指を這わせたりと、丹念かつ縦横無尽な愛撫を繰り返して来る。
「ねえ。も、もう、気が済んだでしょ……」

「はあ？ 冗談じゃないわ。先輩の恋愛経験を全部告白しなさいって言ってるじゃないのさ。処女だったってのは意外だけど、あんなにいやがったくらいだから、ファーストキスカファーストペッティング、何かあったんでしょ？ ちなみに、嘘言ったって、あたしにはわかるからね。先輩、そういうの全部顔に出るタイプだから」

しつこく追及してくる。

「満員電車の中で裸にでもされかかった？ 鮭詰めのエレベーターの中でいたずらでもされた？ その程度じゃあない気がするんだけどねえ、あたしの、女の勘だと」

包皮口に根元から締めつけられた状態のクリトリスは明日香の唾液に濡れてつやつや光り、相変わらずひりひりと痺れつづけている。空気に撫でられる刺激だけでもだ。何しろ今日、生まれて初めて包皮をめぐり返されたのだから当然だった。

そこ苦しそうねえ、とクリトリスを見つめながら、またバイブを操り始める明日香。「ほらほら。気持ちいいんでしょう？ なんかあ、きゅいきゅい締めつけられて、うまく動かせなくなってきたしー」

「あなたそれでも、同じ女なの……？ こんなことをして……なんになるの……？」

「先輩がどれだけイッたら素直になれるか、知りたくなってきたっつうか。先輩の反応がいちいち面白いから、あたしもついいつづけたくなっちゃうんじゃない。やめて欲しければ、隠し事はしないで、ゼーんぶ告白してね。それがいやなら、あたしが飽きるまでジーツと静かにしていればいいだけの話じゃん」

「くっ……」

くやくしくて言い返そうとしたが、その前に。

(そ、そこはダメ)

触手状バイブに生えた突起で、しこりのように大きくふくらんだGスポットをまた擦り上げられ、また背中をベッドから浮き上がらせていた。

(くうっ……!!)

膣粘膜を突起でこじられるたびに信じられないような快感の波が身体の中に打ち寄せてくる。美人女子高校生の全身はもう、濃いどろどろとしたはちみつのような汗に濡れていた。さらに。

「ほらっ、これはどうかしら？」

バイブに押されたビー玉が子宮口近くを擦るたびに。乳輪が指で挟まれくすぐられるたびに。剥き出しの腋の下をざらついた舌で舐められるたびに――。

「ひいっ……そ、そんなに、てろてろ舐められたら……ひいっ！」

きれいにくびれた腰がぶるんぶるん揺れる。首にも二の腕の内側にもふくらはぎにも、はつきりと静脈や動脈や筋肉が浮き上がった。膣粘膜は潤みと締めつけを増し、二本の指をしっかりと食い締めたまま濃い牝蜜の匂いを廃墟いっばいに撒き散らした。もう次の愉悦の大波が迫っていた。すぐそこまで。

（ど、どうしよう……っ）

こんな年下の不良少女なんかに卑怯な道具を使われてこれ以上イカされるなんて、まっぴらだった。撮影もさつきからずつとつづいてる。真くんに見られてもいる。

（も、もう、絶対、イッチャダメよ。もう、これ以上はダメなんだから！）

明日香がまずこころを責め堕とそうとしているのだとわかった。こころを折ろうとしてるのだと。青春真っ只中の一人の高校生女子から、矜持や恥じらいや人間性をごっそり奪い取り、泥の中に投げ捨てようとしているのだと。

（じよ、冗談じゃないわ……こんな子に、絶対屈しないから！）

でも。でも。でも。こりこりと奥を刺激されて――。

「うっ」

ぷにぷにの膣粘膜はキュッと締まってしまふ。同時に肛門も自然にすばまっていた。

埋めこまれたままのアナルバイブが確実に、咲花の陥落を後押ししていた。

こり、こり、こり……少しずつ角度と深さを変えて、咲花の反応を確かめながら明日香は責めをつづけてくる。熱を孕んだGスポットと子宮頸部の縁のくぼみが咲花の弱点だと見て取ったのだろう。集中的にその二か所を責められて――。

「うう……！　そ、そんなこと、されたら」

息が詰まるような強い快楽の波がやってきた。涼やかな気品と高い知性と豊かな色気を備えたグラマーなFカップ女子高校生はその細い眉をぎゅつと寄せ、白い宝石のようにきれいな歯を食い縛った。数秒で強い波はいったん退いてくれた。が。明日香は余裕綽綽。

「先輩、すごいね。バイブを動かそうとしても、なんかびっちり食い締められちゃって、うまく動かせなくなってきた。先輩のおま○こ、いやらしい構造してるね。おっぱいもぶるんぶるん揺れてていやらしい。さわらせたことあるんでしょ？　誰になんだろ。吉田先輩だって知りたそうな顔して、さっきからずっと見つめてるよ」

(い、言わないで……)

「どうした。またイキそうなんだろうが？　この坊やの見てる前で」

青熊も意地悪く声をかけてくる。

(ちっつ、違うわ……っ！)

くちびるをぐっと引き結んだ。意志は充分明日香に通じたようだ。

「ふん。もう二回もイッたくせに。まだ生意気なのね」

寄ってきた不良少女の口は固く閉ざした咲花のくちびるの上から首すじにかけてを這う。もう咲花にはパニックに陥っている余裕すらない。明日香の指は八十九センチの乳房をやりわりやりわりと、焦らしながら揉んだ。時折口から乳首の上にとろりと唾液が垂らされる。膣では浅く深く、浅く深く、執拗にバイブの抽送がつづけられる。「こうしてあげる」

明日香は出し抜けに自分のハーフストッキングを片足だけ脱ぐと、ハサミで切り裂き、できた小さな端切れをくるくると指に巻いた。

「うふふ。知ってる？ 男の子ってねえ、ストッキングに包まれた足でおちんちん擦られると、ザラザラしていい気持ちで、気持ちよくてすぐイッちゃうんだって。だって、先輩も、こういうの好きなんじゃないかなあーって」

ストッキングを巻きつけた指腹でクリトリスを擦り上げられた。

「い、いや、そんな……うッ」

もうこれで何度目かになる発作の前触れみたいなものがやってきて、咲花は必死で

それをやり過ぎそうとした。無理だった。二の腕とふくらはぎの筋肉が浮き上がる。

「う……い。い。うっう！」

十七歳の仰向けの肢体がぶるぶるっ！ とそれまで以上に派手に痙攣した。口はもう食い縛ることはできなかった。眉をひそめようとしても、目を閉じようとしても、それすらもできなかった。よだれと涙と汗を撒き散らしながら肢体が、白い喉が、黒い髪が、ふるふるふる！ と震え動く。

「まーだまだ。うふふ」

それでも明日香はじわじわとした責めをやめようとはしない。若熟れの美乳を持つ十七歳の高校生女子が自分から負けを認めるのを待っているのだ。

「どうしたの？ 青熊さんが言ってみたに、またイキそうなんでしょう。うふふ」

「た、たとえ、あなたなんかにかにイカされたって……身体の勝手な反応に過ぎないわ。それであなたが何かに勝ったつもりにもなるんなら……それは間違いだわ！」

必死で声を振り絞った。

「なにわけのわからないことを言ってるの？ 身体の反応？ そんなこと知らないわよ。あたしはただ先輩の身体で遊んでるだけなんだから。勝ったつもりも負けったつもりもないわ。なんでもないのなら静かにしてればいいじゃん。うるさい牝だわねえ」

「くっ——」

そう言われてしまつては、ますます声を出せなくなつてしまつてしまふが。

もう声を抑えきることなどできない段階になつていた。濡れた腔粘膜をビー玉とパイプで擦り上げられつづけ、胎内の熱はのっぴきならないものになつていた。上昇がじわじわと緩慢だつただけに、熱はもう下腹部どころか成熟した全身に広がつていた。「もう無理……もう無理……うあああ……うアアアアア」

「うるさい先輩だなあー。何を勝手に反応してるのかなあー」

子宮頸部と首すじと脇腹——咲花の身体の反応するところをじっくり探し出し、見つけたそこをタツプりと丹念に責めながら、明日香はわざとそんな風に言う。

「告白する気になつたの？ そうじゃないんなら、もううるさいから何も言わないで黙つててくれる、咲花先輩？」

「……くっ」

そんなことを言われても、反応するなという方が無理な状態に追いこまれていた。咲花だつて好きで反応しているわけではない。だが身体が言うことを聞かない。

(イクッ……また、や、だ、イクッ)

剥き出しのままの肉真珠がビクンッ！ ビクンッ！ と脈を打つ。そこでさらに。

「いやああっ、今、それ、だめっ、そんなことしないでえ！」

膣口からバイブが引き抜かれ、指が入りこんでビー玉も掻き出された。指はまたもぐりこんで膣奥を擦ってくる。一気に根元近くまで深く入りこんでくる。

「あらっ。先輩のおま○こ、ビー玉三つも入ってたのに、もうこんなに塞がっちゃって。すごい圧力ねっ。それに……カズノコみたいな膣粒をびっしり生やしたおま○こ肉があたしの指に吸いついて、引っ張ってくる……この女、やばっ」

膣粘膜を指先で絶妙にくすぐられて、指で何をされるかわからないという恐怖感が甘い蜜の味に取って代わってしまふ。やはりここでも丹念な責めが始まった。膣は挿入されている指に締めつけでお返ししてしまふ。

膣の上壁を擦られたり、下側を引っ搔かれたり、さらには微細なひだを一枚一枚めぐり上げるように刺激されて、心地よい蕩けるような感じに見舞われる……。

「ひだの溝も一枚一枚深いし、おまけに奥の奥まで粒立ってざらざらしてるじゃん。先輩、あんたのおま○こ、マジでやばいよ。愛良先輩のぷりぷりおま○こも撫で心地よかったけど、それ以上かも」

張りついていく粘膜をかき分けるようにして、明日香は奥まで指を進めてくる。絞り出された生温かい新鮮な膣腺液でぐっしりと濡れた粘膜ひだが、さらに一枚一枚

めくり返され入念に擦り上げられる。

(くううっ……たままない。どうしてこんなに)

そう思った矢先。追い打ちのように。

「ううっ——やだっ」

ボウリングの玉に指をかけるように指先が曲がり、クツと子宮口を持ち上げられた。
「それ、だめ」

(あ、やだ、わたし……イクツ)

とくん！ とその周囲の粘膜がひととき濃い愛液を噴き出す快感があった。今日三度目のエクスタシーは一度目二度目以上に強烈だった。なんとか我慢して声だけは漏らすまいとするものだからかえって快感は抜け道を失い、身体中に充満する。

「ううっ、身体が、どこかに、浮いて、腰から、下が、溶ける……ううーっ……！」

尾を引くようなうめきが口を割り、背すじが反り返る。ふくらはぎの筋肉が攀つたように硬化し、わなわなと振動した。なおも途切れ途切れに短くうめき声を洩らしながら、勝ち気な剣道少女は襲いかかってきた激しい快感に身をゆだねてしまっていた。
「うっ……うむっ……ううむっ……んむっ！」

簡単にはおさまらなかつた。もう一度、腰の中を抉るような大波がやってきた。F

カップを備えた高三女子は悲痛な表情を浮かべてまた腰を浮き上がらせ、硬直させた。その発作は一分ほどもつづき、ようやく咲花は汗でべつとりと濡れた背中と腰をがくと寝台に落とした。だが。弄ぶように子宮口を指先でくねくねと愛撫されて間を置かずにもう一回あごを突き上げ、四肢を再度硬直させる。

ぶるッ！　ぶるッ！　退ききらないまま、また不規則な痙攣が始まっていた。

汗とよだれで濡れた白い喉をのけ反らせて、それでもなお歯を食い縛ろうとしながら、その歯の間から、うむっ、ううむっ、と囚われの高校三年生女子は繰り返して重いうめき声を噴き出させる。

「先輩ってさあ、口は正直じゃないけど、身体の反応はすごい正直だよねえ」
明日香がせせら笑う声が聞こえた。

※

二十分後。五度目の強制絶頂を迎えて咲花はとうとう屈服し、荒い呼吸の合間に、
○軍兵たちに拉致され犯されかけた過去の一部始終を告白していた。

恋人の真にも聞かれていた。知られてしまったのだ、とうとう。口を穢され、乳房を揉みまくられたことを。

「ふうん。すごい経験したんだねえ。在日○軍兵かあ。ちよいとした事件じゃん」

「……は、あ……は、あ……は、あ……は、あ……つ」

五回の激しい絶頂は全身から体力を根こそぎ奪っていた。いや、身体も限界なら気持ちも限界を超えていた。

見る者すべてに勝ち気さを感じさせていた強い光が瞳から消えていた。逆に、女子高生らしい淡く清楚な色気は消えるどころか今やすっかり強調されて、ピンクの湯煙のようになってもうもうと立ちこめていた。

コンクリートの壁には青熊の手によって釘で『正』の字が刻まれている。

「五回で陥落か。意外と骨がなかったな。突っ張っていた割にはな。ま、ろくに性経験も積んでない、高校生ならがんばった方か。暴力的な外国人しか知らなかったんじやあな。快感には免疫がなかったか。ククク」

青熊が偉そうに批評めいたことを口にする、明日香もうんうんとうなずく。

「ほーんと。でも先輩。あんたたち姉妹って、つくづく狙われやすい体質なのかねえ。笑っちゃう。愛良先輩がうちの兄さんたちに犯られた、二か月後？ それマジ受けるんですけど？ ふふっ。ほらほら、吉田先輩もがっかりした顔してる」

「え……」

おそるおそる顔を横に向けると、恋人はびっくりしたような表情のまま、口をぱく

ばくさせている。何か言おうとしても言えなくなっているみたいだ。

(ま……真くん……)

気持ちの整理がついたら話さなければならぬとは思っていた。口を一度穢されて
いるこんなわたしでもいいの？ と。だが。こんなかたちで知られたくはなかった。

「ねえ、おねがい……も、もう……気が済んだでしょう……全部話したんだから」

すすり泣きしながら咲花は哀願した。手錠を外して、と。家に帰らせて、と。

「はあ？ まだだったら。先輩には来月、クラブで売りをして欲しいんだから。無理
やり拉致って連れてったら犯罪になっちゃうからさ。どう？ 約束してくれる？」

「ど……どうして、わたしが、そんなことを」

「先輩、美人で、いい身体してるから。客が取れるから。さあ。同意してくれる？」
「……いやに、決まってるでしょう」

咲花はそう答えた。

明日香は目を瞠る。

「ちよつとちよつと。おま〇こを濃いピンクにしてぬるぬる濡らしてるくせに、まだ
落ちてなかった？ まあいいわ。じゃあもう少しかわいがってあげるから。うふふ。
ねえ、兄さんたちも手を貸してくれる？ 三人がかりでかわいがってあげようよ」

「よっし。へへへ」

「おもしろえ。げへへ」

竜也と拳也がカメラやビデオカメラをいったん置き、ベッドに寄ってくる。

「い、いやだ！ あんたたちなんか、さわられたくないっ！」

抗議は無視された。固く尖りきった乳首にそつと触れられた。左右同時にだ。明日香もふたたび咲花の性器に指を挿入してきた。五回イカされて、まだイキやすくなつたままの性器に。

（こ、この子、いったい、どこまでわたしを苦しめるつもり……くふっ……くふっ……）

ねばった汗にまみれ、全身から湯気を上げながら、それでもうめき声だけは押し殺して咲花は悶えた。首を撫でられる。腋の下をくすぐられる。子宮口がまた指の腹でクツと持ち上げられる。

（そ、そんなに、こじ開けるように、されたら、く。くうう）

男性に対する嫌悪感は気持ちの中に根強くあるのに、肉体は勝手に反応してしまう。咲花は切なげな声を喉から洩らし、腰をみだらにうねらせた。乳首をくりくりと撫でていた白Tシャツの指がお腹に降りてきた。屹立しきつたまま放置されつづけていたクリトリスに黒タンクトップの指が襲いかかってきた。

(き、気持ち悪い！　こんな男なんかやだ……だつ、だめつ。そこはっ)

触れられたとたんだった。引き締まった腰に熱いおのきが走った。咲花は耐えた。いや。耐えようとしたつもりだった。耐えられたと一瞬だけ思った。だが。痛みに似た刺激が下腹部を貫いた。その腰がしなるようにベッドから浮いた。

(ああ、きたッ……)

——いくつ。

「う」

腰が浮いたまま硬直した。尖りきつた強い性感の波が押し寄せて早熟な十七歳の肉体を内側から突き上げた。指を呑みこんだままの粘膜が激しく収縮し、おびたほしい量の蜜液を分泌させた。子宮液とともに尿口からもどろりと水あめ状の汁が噴き出していた。ぶるッ。ぶるッ。ぶるッ……。

(うううッ——ッ！)

挿入されている指をさらに内側に引きこもうとでもするかのような苛烈な収縮の発作が、それでもゆっくりと弱くなってくる。のけぞっていた背中のしなりがおさまり、腰と尻がマットレスのない寝台の上にどさつと降りた。

「はあっ……はあっ」

絶頂の瞬間、全身からまた激しく発汗していた。それまでの汗の量の比ではなかった。股間も蜜でべとべとに濡れ光っていた。激しい呼吸で波打つ乳房の上にも太ももにも濃い汗や汁が流れてみだらなすじをつくっていた。

青熊が『正』の字の下に『一』を刻んだ。

明日香が話しかけてくる。

「またイッたね。これで今日六回目。ふふふ。どう？ もうさすがにイクのは苦痛になつてきてるでしょ？ 女が何回もイけるなんて嘘だからね。クスリでも盛られてない限りはね。これ以上つづけたら、先輩、身体か頭がどうかなるよ。いやでしょ。そうなる前に、約束してくれる？ パーティーに来て、売りをしてくれるって」

「ひ、卑怯者……」

太い脂汗をこめかみの上にも流しながら、優美な黒髪と重量感たっぷりの乳房を持つ高三の女子剣道部主将はそう抗弁した。くちびるをあらためて引き結んだ。まだ濃い余韻に襲われていたが、極力それも気取られまいと歯を食い縛った。

「卑怯者ですって？ 咲花先輩、まだ逆らう気？ ふうん……そんならいいわ。先輩が参つた言うまで、何回でもつづけてあげるから。後悔しても知らないよ」

いくら気丈でも、いくら強情でも、すでに六度ものぼりつめてしまった咲花の身体

はもはや不良少女になされるがままだった。

こりっ……こりっ……と明日香がひとさし指をうごめかせる。もう生け贄のGスポットを熟知しきっているとでもいうような、確信に満ちた責め方で。

咲花はその指の動きに合わせ、いやいやをするように顔を右に左にと向ける。悶える声が出かかり、それでもかろうじてそれも呑みこんだ。

「……しぶといのね」

明日香はあわてた様子は見せない。囚われの十七歳女子の顔を覗きこみ、その表情を観察しながらじつくり、じつくりと責めをつづける。咲花がまた必死でくちびるを噛み締め始めるのに、さほど時間はかからなかった。

下半身にはまだイッた直後の強い興奮がまだかまっていたまま。口を閉じてでも鼻腔はひくひくと動き、上下する胸に合わせせわしない鼻息が洩れる。頬はまた濃い桜の花びら色に上気してきた。そしてとうとう肩を上下させての荒い呼吸が始まり、喉の中からまたすすり泣きにもしゃくり上げにも似たような細かい音が立ち始めた――。

「目なんかトロロンとさせてるくせに、まだ菌を食い縛ろうとする力残ってるの？ そんなにがんばらなくてもいいじゃない、ほんとにもう。強情なんだからん」

金髪不良少女の膣内での指遣いは遠慮会釈のないものになってきた。十七歳の若熟

れの肉体の中にいまだ埋もれたままでいる官能という名の宝石を、膺を指腹で擦ることによって掘り返し、磨き上げ、輝かせようとでもしているかのような。

「どうしたの。つらいの？ またイキそうなの？」

「……か、関係ないわ、あなたにはっ」

ありつただけの気力を振り絞って咲花は不良少女を睨み返した。六度もはつきりとのぼりつめてしまった後では、羞恥の気持ちが一番初よりは薄くなっていたのだ。その分、くやしさを感じる気持ちの方がより強くなっていた。

「ふうーん。まだそんな口きけるんだあー。じゃあ、これはどうかなあー」

「ああっ……あ。そこは——今はダメ」

またGスポットをコリコリと愛撫されて、耐えに耐えていた口からとうとう声を洩らしてしまう。沈んでいた腰と背中がまたぐうーっと持ち上がってしまう。

（ダメよ、ダメ……負けちゃ！）

しかし身体はやはりもう言うことを聞いてはくれなかった。身体中の血液が何かぬるぬるした快楽物質に変化でもしたかのように全身が甘く痺れていた。強い尿意みたいなものを催していて、でもそれは尿意ではなかった。膝からうつろに力が抜け、逆に腰の芯や乳房の奥でぐつぐつと何かが煮立っている。

(が、我慢しなきゃ、いけないのに……我慢、できない……無理。わたしにはもう) ぐやしいのに。イヤなのに。

「げへへ。コリッコリしてるぜ、乳首」

「へへへ。ピンクに火照ってるぜ、肌」

竜也が乳首を吸ってきた。拳也は髪を撫でながら首すじに吸いついてきた。黒人兵にキスされたトラウマで一瞬だけ体温は下がる。けれど――。

また肉体が意志を裏切ろうとしているのが咲花にはわかった。両手と両足の指に力をこめ、快感をどこかへ逃がそうと思った。また子宮口が指に圧迫されていた。熱く灼けた愉悅が、疼く子宮を揺さぶりながら湧き上がり、指を含んだままの膣口と小さな尿口から恥ずかしいほどの快感を伴って噴き出した。

(こいつらのこと、許せないのに、許せないのに、ああ。イクッ……)

喉を裂くようにして絶叫したつもり、だった。今度は声がろくに出ていなかった。

「……うむっ！ う、う。う。うう……むッ――ッ」

ビクビクビクビクッ！

「……ふううううッ――ふううううむ……！」

むせび泣くかのように、黒い髪と整ったあごから汗のしずくを弾き飛ばし、豊かな

乳房と尻を備えた女子高校生はのぼりつめていた。大人っぽく発達した腰回りをうねらせるそのアクメ姿は、学園で見せる凛々しい剣道部主将の姿とはまるで別人だった。青熊はまた釘で壁に線を一本刻んだ。

「七回目だ。敏感な身体なんだな。嫁にしたら毎晩かわいがり甲斐があるな」

「はあっ……はあっ……」

「でもでも。どうせまだ生意気なんだよね、先輩？ だからもう、あたしは何も訊かないし言わないことにするわ。先輩が、どうかやめてください、明日香様の命令をなんでも聞くからやめてくださいって頼むまで、つづけてあげるねっ」

あさましい絶頂からゆっくりと咲花が降りてきても、まだ不良少女は膣内に指を挿入させたままだった。その指は、豊かな乳房と引き締まったウエストと見事に張り出した腰骨を備えた熟した肢体がたった今噴き出させた蜜でべとべとだった。

Fカップの肢体に取りついた双子もすぐに責めを再開させる。またしても、うら若い高校三年生女子の生々しいうめき声が廢ビルの一室の空気を震わせ始めた――。

※

六月の日没は遅く、空はゆっくりと青色から群青色ぐんじょうに変わろうとしていた。

三時間半が経った。

コンクリートの壁一面にびっしりと『正』の字が刻みつけられている。

正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正
正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正
正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正
正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正 正

咲花は遂に陥落していた。なんでも命令を聞く、と。だからもうやめて、と。その哀願の瞬間も含めて一部始終が青熊や双子たちによって録画されていた。十七歳の女子高校生が汗と体液を振り絞るようにしながらのぼりつめつづける三時間半の生収録映像といっしょに。

部屋中にもうもうと思春期の高校生女子の発情した体臭が立ちこめている。

大量の水をかぶったかのように咲花は全身を濡らしていた。

「……ねえ、咲花先輩、大丈夫？」

「はあ……っ、く、はあ、はあ……っ、く、はあ……はあっ」

乱れきった黒髪はねっとりとした汗にまみれ、陰毛は飛び散ったゼリー状の愛液に

濡れてからまり合っていた。剥けた包皮は相変わらず肉真珠を根元からきゅうきゅうと締めつけている。鬱血したかのように赤みがかった肉真珠はどくどくと脈を打ち、ふやけて膨張した小陰唇はぱっくりと開ききって、中身の桃色粘膜を晒していた。

前が開いたセーラー服は汗や流れ落ちてきた涙で肌にびったりと張りついていた。肌は赤く染まり、白い湯気を上げている。寝台は尻の下から太ももの間を中心にして、べつとりとした愛液の層で覆われていた。知らない者が見れば、まず大量の水あめを撒き、その上に咲花を横たえたかのような様相を呈していた。

「はあ……っ、くっ、はあ……っ、くっ」

身体がばらばらになるのではと思うほどに、何度も何度も絶頂を告げ、腰をこわばらせ、四肢を痙攣させた。重なつた疲労は限界を超えていたが、失神だけはしなかった。失神をつかさどる神経が昂ぶりのせいで完全に麻痺しているのだ。

「ずいぶんいやしくイキまくったこと。ふふっ」

「はあ……くっ、はあ……くっ、はあ……くっ、はあ……くっ、はあ……くっ」

荒い息に合わせて、高校生離れした早熟な乳房が上下している。持ち主に安産を約束してでもいるかのように見事に漲った左右の腰骨も「くっ、くっ」といううめきに合わせて、ひくっ、ひくっ、とみだらがましく小痙攣を繰り返していた。激しすぎる

絶頂のせいで、いまだに濃い余韻に見舞われているのだった。

「こ、こんなすごいイキッぷり見せられて、おれ、もう我慢できねえ！ あの巨乳のJKちゃんなんかもう完全にどうでもよくなった！」

「おれも！ このお姉ちゃん犯れりゃあ、もう死んでもいい！ 青熊さん、商品にするつもりかもしれねえけど、いいでしょ！ みんなで犯っちゃいましょうよ」

双子が口々にそうわめく。しかし青熊はそれを制した。

「まあ待て。レイプはまずいだろ、お前ら。それじゃあ犯罪だわな。また別荘に逆戻りになっちゃうぞ。このお姉ちゃんにも選ぶ自由を与えてやらねえとな。お前らと少し遊んでいくか、すぐに帰るかかっていうな」

「えっ……そんなあ、青熊さん」

「青熊さん、いいじゃないすか」

「いいからお前らは黙ってろ」

がっかりした表情になる双子を無視し、青熊はアナル棒を抜き、咲花の手足の手錠も外して、姉ちゃん、帰っていいぞ、と言った。

(え……?)

咲花は耳を疑った。明日香もきよとんとしている。

「ただし、一分以内にだ。一分以内に姉ちゃんがここから出て行ったら、ついでにその彼氏も解放してやる。いっしょに帰っていいぜ」

やめろやめろと三時間以上もさけびつづけていた真は、今はうつむいて、咲花同様にぐったりとしていた。相変わらず椅子に縛りつけられたままで。

青熊は瞳をぎらりと光らせ、ただし、と言った。

「ただし、一分経つてもまだ、姉ちゃんがここにいたら、それは、姉ちゃんが自分の意思でここに残ってる、つてことだからな。いいな。ククク」

スタート、と青熊は非情に告げた。

(くっ……)

手錠を外されたとはいえ、咲花はまだ仰向けでベッドに横たわったままだった。壁の一つの面を『正』の字でびっしりと覆うほどの凄まじい回数におよぶ絶頂に身体は疲れすぎ、もう起き上がるだけでも重労働。

(でも……負けないわ。そんなくだらない条件、軽くクリアーしてみせるから！)

なんとか身を起こし、咲花は床に足をついた。歩き始める。急に目の前が暗くなつた。貧血のような状態だった。歯を食い縛り、意識をなんとか繋ぎとめて、一步一步足を踏み出す。生温かい粘液が太ももをつたい、床にぽたぽたと落ちる。愛液だろう。

腰が痛み、足もうまく動かせなかった。出口は十メートルくらい先に過ぎないのに。三歩歩いて身体が崩れ、咲花は床に膝をついていた。クリトリスもまだ露出したままで、身体を動かそうとするたびにジンジンとした悦感が体内に送りこまれてくる。

（帰る！ わたし、帰る……！ こんな奴らの思い通りになんか、ならない……っ）

最後に残された抵抗心にしがついて、お腕のような乳房とぬめる女性器を備えた十七歳の高校生女子はよろよろと膝で這いずり、出口を目指した。が。

出口まで後三メートルというところで力尽きた。三時間半にわたってほとんどぶっ通しでイカされつづけた疲弊は強く、肘にも膝にももう力が入らなかつた。動かない身体を無理やり動かそうとして前のめりになり、そのまま身体は床面に向かって横向きにばたりと倒れこんだ。そのまま数秒が過ぎた。

「……時間切れだ。残念だったな」

腕時計を見ながら青熊が言った。

「竜也と拳也に抱かれないから、ここに残るってことだな。ククク」

「……違う、何言ってるんだ！ 咲花ちゃん、しっかりして！ 早く逃げるんだ！」
「だからてめえは黙ってろって」

青熊がまた真を殴った。咲花の恋人は椅子ごと後ろに倒れてしまう。

「ようし。犯ってやるぜえ……」

黒タンクトップの竜也が咲花の足首を掴み、クリームチーズのような愛液をべつとりと貼りつかせた太ももを広げる。そのままバックの姿勢を取らせ、後ろから覆いかぶさる。這いずる余力ももう咲花にはなかった。あっさり腰を後ろから抱えこまれ、愛液にまみれた膣口にペニスをねじこまれる。

「……ううっ……いやあ……」

(や、やだ……か、硬い……熱い。やだ、怖い！)

バイブとは違っていた。ここまで恐怖を感じたのは昨年の倉庫での体験以来だ。膣口のすぐ内側に溜まっていた愛液が挿入された拍子に、何かが破裂でもしたみたいにぶじゅっ！と飛沫となつて飛び散つた。

無駄だとわかつていても恋人に救いを求めてしまう。

「ま、真くうん！ わたし、いやだつ！ たすけて！ 真くん、たすけてえっ！」

「るせえよつ！ おらあつ！ おらつ」

竜也は腰にしつかりと片腕を回し、もう一方の手では高三女子の汗まみれの黒髪を手綱たづなのように引つ張つて、より繋がりを深くさせる。プロレスラーまがいの巨漢の股間からそびえるコーラ瓶のような男性器が、みり、みり、と埋没してきた。

ところが竜也は意外にも、いきなりガシガシと腰を遣い始めたりはしなかった。

(な、何……?)

咲花の膣を味わい始めたのだ。

「ああ……気持ちいい……あれだけイキまくったくせに、締まりもいいしよお……明日香が言った通りだな……おま○こ肉が、やわらけえのに、極細マイクロファイバーの脂取りみてえにざらざらしててちんぽに引っかかってくらあ……たまんねえや」
そう言ったかと思うと、じつと動きを止めた。

(やだ……硬い……おそろしい……こ、こんなので掻き回されでもしたら……)

「へへへ、お姉ちゃん。いくらイキまくったからって、所詮指やビー玉じゃあ、物足りなかつたんだろうが？ やつと本物が入ってるんだ。うれしいだろうが？」

(奪われた……今度こそ、完全に、奪われちゃってる……)

わかった。相手の望んでいることが。自分はこの男にもまた、身体ではなく精神を犯されようとしている。こころを無惨に弄ばれようとしている……。

坊主頭の巨漢はゆっくりと、本当にゆっくりと、まるで鉄の棒のように硬い男性器を動かし始めた。

「へへへ。てめえはもう、売りをする時以外は、おれら兄弟の専用肉奴隷な」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!